



西松会新聞

The Yushokai Shimbun

第9号

平成28年(2016)3月10日発行



巻頭挨拶 P3

- 緒方 徹 (昭49卒 会長)：「流水不争先」

西松会幹事会より P4

- 倉崎 嘉幸 (昭57卒)：幹事長退任に当たって

小平G人工芝化への期待 P7

- 有田 稔 (昭44卒)：人工芝化への思い P7
- 河内 純一郎 (昭51卒)：小平グラウンドの人工芝化に向けて P9
- 蓮池 就介 (4年 主将)：学生側からの想い P10

リーグ戦を観戦して P11

- 清水 征四郎 (昭41卒)：リーグ戦 観戦記

戦いを終えて P13

- 蓮池 就介 (4年 主将)：礎 P13
- 金田 大樹 (4年 GM)：決意と感謝 P14
- 青木 嵩 (4年)：充実の4年間 P15
- 岩永 章佑 (4年)：虚しさと感謝 P16
- 大塚 幸司 (4年)：この4年間で学んだこと P18
- 小笠原 健太 (4年)：戦いを終えて P21

- ⚽ 小島 秀太（4年）：サッカーとア式蹴球部と私 P22
- ⚽ 後藤 守（4年）：サッカーへの情熱 P23
- ⚽ 榊原 龍斗（4年）：後悔はない P24
- ⚽ 竹本 圭佑（4年）：後悔と誇り P25

平成 28 年度シーズンに向けて P26

- ⚽ 大口 柁文（3年 新 GM）：今シーズンの抱負 P26
- ⚽ 山崎 光（3年 新 MGR）：マネージャー長としての決意 P27

東西・西松会有志の会 P28

- ⚽ 松丸 鉦市（昭 31 卒）：関東西松会・シニア有志の会 P28
- ⚽ 柴田 暁（昭 46 卒）：関西西松会のご報告 P29

海外便り P30

- ⚽ 高橋 良多（昭 51 卒）：Selamat tengah hari (こんにちは) P30
- ⚽ 村上 浩三（昭 61 卒）：どっぷりイスタンブール P32
- ⚽ 川上 耕（平 4 卒）：ニュージャージー 少年サッカー事情 P34

自由テーマ P36

- ⚽ 神代 祥夫（昭 29 卒）：思い出の数々 P36
- ⚽ 石井 徹（昭 30 卒）：西松会六十年・・・FC 東京前夜まで P38
- ⚽ 村上 信勝（昭 36 卒）：我が青春の思い出 P41
- ⚽ 栗又 俊二（昭 42 卒）：恩師回想 P44
- ⚽ 土方 周明（昭 52 卒）：私と FC 町田ゼルビアとの出会い P46
- ⚽ 安部 太郎（平 5 卒）：GM 回顧録 P48
- ⚽ 彦坂 達哉（平 25 卒）：ダブル優勝に向けて P50

追悼 P51

- ⚽ 志摩 憲一（昭 31 卒）：故高田勝巳先輩 一周忌追悼記

編集後記 P54

- ⚽ 福本 浩（昭 52 卒 編集長）：ほろ苦い記憶

🏆 「流水不争先」

緒方 徹（昭49卒 西松会 会長）



新しい年を迎えても、内外で不安なニュースが続いている。今年は政治・経済でも大きな出来事がある。そうした中で一橋大学ア式蹴球部は、新しいシーズンに入った。技術も、考え方も、性格も様々な個人が集まる団体競技をどう高めてゆくか。特にサッカーはスローイン以外では手を使えないスポーツであり、より様々な解釈、判断が入る余地がある気がする。

1対1の勝負を展開する世界の先人を見てみると、昭和を代表する囲碁棋士のひとり、高川秀格が座右の銘とした「流水不争先」。高川は、終戦後間もない時期から本因坊のタイトル戦を9連覇して新記録を作り、後に第22世本因坊となった。

出典は判然としないのだが、中国の古典や武道の文書などに似ている言葉がある。禅の格言のように引用されたり、茶席の掛け軸にも用いられたりしている。高川秀格は明治期後半に名人中の名人と言われた本因坊秀栄の囲碁に憧れ、「自然でありながら、いざとなれば相手をねじ伏せる力を内に秘めて、明るい大局観でサラリと勝ってしまう。水が高きから低きに流れ落ちるようだ」と評している。

「流水不争先」は、川の水は早いところも遅いところもあって、先を争うように見えるが、それぞれの立場に従ってひたすら流れ続けて、やがて1つに合流し大河になっていくのだという趣旨と解釈されている。

ア式蹴球部でのユニット制やイヤーズブックなど学生諸君が発案し、育ててきている様々な策は着実に成果を出してきていると思う。部の皆が、それぞれの立場で能力を磨き、成長しながら、目標達成に向けて団結し、大きな流れを作り出していくことを切に願っている。

西松会幹事会より

● 幹事長退任に当たって

倉崎 嘉幸（昭 57 卒）



一身上の都合で、昨年末に代表幹事を退任させて頂きました。

副代表幹事で3年、代表幹事として5年、会員の皆様方には大変お世話になりました。

退任にあたり、これまでを振り返りたいと思います。私が代表幹事になった時に目標とした事はOBも含めた一橋サッカー部の価値を高めたいという事でした。会社であれば、時価総額です。もっともっとポテンシャルがあるのに活用できていない。人生の色々な局面で一橋でサッカーをやってよかったと感じる人は多いと思います。ですが、大学卒業後はつきあいも限定され、転勤の中で学生からの情報も途切れがち。またOB会について、いい印象を持たないで卒業したOBも多かったと思います。学生にとってもOB会は今も昔もありがたくも煙たい、今ひとつよく分からない存在のようでした。「もっと共感、愛着、プライド、感動などを共有できる多士済々の集まりの筈だ。どうすればいいか？」代表幹事の5年間で取り組んだことは、以下の通りです。

まず、会員に対する情報発信を改善しました。メールアドレスの補足率を約60%から90%以上に高めました。また会員名簿を紙からウェブに移し、常時メンテするように致しました。また各種情報の発信も封書から順次WEB、小平通信へと移行を図りました。西松会新聞もウェブに移行し、OB交流のプラットフォームになってきました。

学生の昇格支援の為には部員数の増加が必須でした。アメフトOBより「新歓予算200万円とイヤーブックを活用し、新入生へのアプローチ中」との情報をもらい、サッカー部の新歓予算も50万円に増額。イヤーブックも創刊し毎年続けました。ウェブサイトについても学生主導、一部若手OBに協力を頂きながら、ワイド画面、ムービー等の高機能対応を図りました。これを活用した学生が作る新歓のムービーも年々クオリティが上がり、新入部員確保に寄与しました。部員数は徐々に増え30名代から60名代へ倍増できました。部員数の増加に伴い大型予算も必要になってきました。そこで4～5年に1人の割合の幹事だけでは不十分になってきましたので、各年次に1名、年度幹事を任命させて頂きました。その年度幹事を中心にした会費の督促にも力を注ぎました。それにより200万円台の会費・寄付金を400万円台に引き上げました。

また学生主導型で、外部コーチの導入に取り組みました。最初はフィジカルのコーチのみ、それが心・技・体の3コーチ制となり、更に10個程度の専門性のあるユニット制へ移行・進化ができました。筑波大サッカー部の“局”制度に近いですが、一橋オリジナルです。外部コーチのコストは月額3万円程度に抑えています。学生自らが考え抜いた学生主導で運営する体制が徐々に整備されてきました。

人工芝化にも取り組みました。大学に出かけて、所轄の部署から情報収集。
アメフトのOB会とも連携。業者との打ち合わせを重ねました。OBの皆さんとも
世代別にウェブでアンケートを取ったり、総会で報告したりと、意見交換の場を持ちました。
残念ながら、これは最もハードルが高い難関でした。

OBがボールを蹴るイベントも増やしました。新春のOB戦以外に東大との秋・冬の定期戦、
三商大戦、神戸大との交流試合など。またシニアはユニフォームを作り、年中クラブので練習
試合に参加させて頂きました。若手も昨年からOBチームを作り、東京都リーグに参戦中です。
総会の方も会場を変更し参加費も40%削減。寺西先生の講演会も総会の中で実現できました。

★2014 東大OBとの新春初蹴り会



倉崎

取り組むテーマをどう見つけ、解決のために、どうアプローチをしたか？ 課題は、
ベンチマークから出てきました。若手OBにお願いして東京都1部から4部のサッカー部の
の部員数とスタッフ数をまとめてもらいました。明らかに部員数、スタッフ数が不足して
いました。これを幹事会と総会の場でも共有しました。ベンチマークは各部のホームページを
分析することによっても得られます。大体のことは分かります。またアメフトのOB会等との
直接面談を通して多くのことを学びました。最後にグラウンドです。レギュラーの、サブの、
ベンチの応援の姿を見て、声を聞きながら考えました。グラウンドが“現場”だと思います。

どう課題に取り組んだか？ 小さく産んで大きく育てました。

アイデアについては、まず会長・副会長に具申しご意見を伺いました。試してから結果を踏まえ
再提案しました。すぐできる小改善は、即実行。例えば新春のOB戦、最初は、まず朝集まって
挨拶をするようにしました。そして若手の時間帯とシニアの時間帯を作りました。次に有料で
懇親会を始めました。懇親会では学生とOBにスピーチをしてもらうようにしました。そして
そして会社から販促品などを持ち寄り、MVP・得点者にプレゼントをするようにしました。
年々参加者も増え、雰囲気も変わってきました。

西松会は“同好の士の集まり”ですので、健康・家庭・仕事が優先です。幹事職も受けられる時に無理のない範囲で受けてもらうのが理想です。とはいえ、進んでやる人がいないのも現実。背中を押し、年次に必ず1名は副代表幹事を出してもらうような事は最低限必要です。幹事の年数も3～5年ぐらいを目安に、交代できる人がいればどんどん交代して頂く。幹事の仕事は大変ですので、セーフティネットの整備も必要でしょう。やれる、やりたい時期に登板し全力投球してバトンをつなぐ。同期で4～5名の幹事経験者がいれば、組織も変わってくると思います。義務感ではなく、自発的に、自由闊達に、ポジティブに、というのが理想です。その為の仕組みを作る事が課題です。

最後に、この5年間は、たくさんの皆様にご支援、激励を頂戴し、厚く御礼を申し上げます。多くの成果と一緒に頑張って頂きました沢山の方々のご尽力の賜物です。何ひとつ簡単なものはありませんでした。正しい目標、正しいプロセスからは、正しい結果が出たと思います。念じて実行したことは、実行しただけの結果が出たと思います。点は線になり面になっていきました。学生にも平凡な努力では平凡な結果で終わる、全員で力を合わせてブレイクスルーしよう、と言いつけました。それに見事に応え、大きく成長してくれたと思います。頼もしい限りです。

“All for All”と“感謝”。部旗を新調した時に、学生提案で、旗に入れた言葉です。これまでを振り返った時に浮かんできました。次の世代も新しいタレント、アイデア、価値観で伸び伸びと活躍して頂くことを期待しています。新体制への皆様方の温かいご支援宜しくお願い致します。最後に、一橋大サッカー部と西松会の、益々のご発展を祈念申し上げます。



小平G人工芝化への期待

人工芝化への思い

有田 稔（昭44卒）

「人口芝化への期待」をテーマに西松会新聞への原稿依頼がありましたが、「人工芝」のテーマだけでは書くことも限られますので「小平グラウンド」に関する思い出等を含めまして、取り留めのない内容の拙文ですが、下記、寄稿いたします。



◆小平はサッカーグラウンドと言えるのか

3～4年前の東京都リーグ・東京経済大学戦だったと記憶していますが、試合開始時は小雨模様の天候が前半戦終了後、ハーフタイム中に土砂振りとなり、みるみるうちに雨がグラウンドに溜まって「湖」状態になり、プレー続行不能で試合は中止となりました。後日再試合とのこと。前半 0：2で負けていましたので恵の雨かと思われましたが、再試合でも敗れたと聞きました。このグラウンドの悲惨な状況に私は唖然としました。「小平湖」と称した50年前と全く何ら変わらず、半世紀経過してもグラウンドは関東ローム層の土のままか、と。

★2012年の秋季リーグ戦で「小平湖」となったグラウンド



50年前も雨が降ればグラウンドでは練習できず、やむなくキャンパスを出て街中を走って、多摩湖までランニング練習となることもありました。汚い身なりの学生20名前後の集団が街中を疾走する訳ですが、当時のはどかだったから街中のランニングも許されたのでしょう。途中、電信柱の経過を合図に「2本目の電信柱までダッシュ」とキャプテンの掛け声で何回かダッシュをさせられるものですから、とにかく多摩湖までの往復ランニングは相当きつかった記憶があります。雨が降ると、恐怖の多摩湖までの往復マラソンかと気分も憂鬱になったものです。雨で練習ができない、雨で試合が中止になるグラウンドが半世紀以上も続いているのは異常でしょう。これは、もはやサッカーグラウンドとは言えないのではないのでしょうか。国公立を含め、私大のサッカーグラウンドのほとんどが人工芝になっていることを鑑みれば、この状態は、一橋大学の恥部と言えるかも知れません。

◆リーグ戦の応援と現役への支援

私は大学卒業後から40年間、西松会の活動に全く関与せず、現役のリーグ戦の応援も皆無の状況で全く役に立たない西松会員でありました。そんな体たらくな小生に5年ぐらい前、昭和44年卒同期の清水幸男君（昭和41年卒・清水征四郎さんの弟）から「有田、たまには現役のリーグ戦の応援に来いよ」と声を掛けられたこともあり、何試合かは小平グラウンドへ応援に駆けつけ始めました。その後、応援する度に現役学生が奮闘する姿に感銘を受けたり、勝って喜び（特に昨年の秋季リーグの東大戦に4：1で快勝した試合は感動しました）、負けて悔しがり小生が年を取ったこともあって（現在69歳）彼らを可愛いと思うようになりました。40年の無沙汰を取り戻すべく、ここ1～2年は時間が許す限り応援に行くようにしています。こうして現役諸君を支援したい気持ちも芽生え始め、彼らに人工芝のグラウンドで練習をさせてあげたいと思うようになりました。

◆人工芝化への思い

かつて西松会の故中路大先輩が「小平は聖地」だと仰ったそうです。関東ローム層の土のグラウンドへのノスタルジーも含まれているのかも知れませんが、今やサッカーグラウンドと呼べないような場所を「聖地」とするにはあまりにもお粗末な状況です。人工芝化を実現し、名実ともに小平サッカーグラウンドを「聖地」にするためには、一部の幹事会メンバーの方々が限られた時間の中、人工芝化を推進していることをご理解いただき、西松会の皆さんに現役の学生の試合に関心を持っていただくところから始まると思います。1人でも多くの方にリーグ戦に足を運んでいただき、現役の頑張りを肌で感じ、彼らを支援していただけたらと思う次第です。

小平グラウンドの人工芝化に向けて

河内 純一郎 （昭41卒）



高校1年からサッカーを始めて46年間、いまだに真夏も真冬も、週1回はボールを蹴り続けてます。ありがたいことに最近は、ほぼ全てのシニアリーグの試合は人工芝か天然芝で行われるようになっていました。私のように膝が悪いプレーヤーも多いので、本当に人工芝は優しいと実感します。



実は、これまでにサッカーで大きなケガを2回しました。1回は相手との接触プレーで下腿骨折。もう1回がアキレス腱断裂です。こちらは明らかに土のグラウンドの状態が悪いことに起因したものです。あの時、もし人工芝であったらと思います。恐らく同じような経験をしたが、大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。

また最近のプレミアやリーグの試合を観ましても現代サッカーでは益々コンタクトの激しさが求められているようです。こういう時代にあっては、少しでもプレーヤーの負担が少ない環境が絶対に必要であり、人工芝のグラウンドは、そのための最低条件といえると思います。

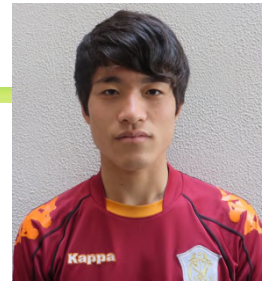
さて、人工芝グラウンドの必要性の2つ目は、技術向上です。先日ドーハで行われたU-23 アジア選手権決勝の日韓戦で浅野選手が決めた決勝ゴールは、とても印象的でした。相手側のエリアに入ったあたりからMF 中島が出した浮き球を、浅野は韓国CBに体を当てて巧みにキープ。そして、次のワンタッチで得意な左足側へボールを運びながらGKをよく見てシュート角度を作り、見事ゴール右隅に決めました。感じたことは、今の技術レベルは単にボール扱いがうまいというだけではダメで、それをトップスピードと激しいコンタクトの中で実践できるかというレベルにまで上がったということです。OBとしては、将来一橋からも、ぜひ浅野選手のようなセンシティブなボールコントロールができるプレーヤーが出て欲しいと思います。そのためには高いレベルの技術を磨くことができるグラウンドが、まず必要です。

以上、人工芝グラウンドの具体的な必要理由を2つ取り上げましたが、もし緑の環境ができれば、また他のサークルや地域にも開放していただければ、一橋サッカーの交流の場として、大いに盛り上げていけるのではないのでしょうか。



学生側からの想い

蓮池 就介 （4年 主将）



18分の4・・・これが何の数字か、お判りかと思います。

2014年シーズンの私たち一橋の全試合において、ホームで行われた試合の割合です。たったの4試合しか、小平でリーグ戦を行うことができませんでした。

去年の本稿における書き出しです。この事実に驚かれた方もいるのではないかと思います。そして、ついに昨シーズン、私たちはリーグ戦18試合すべてをアウェイの人工芝グラウンドで戦いました。ホームの小平では1試合もすることができなかったのです。1試合もすることができなかったと申しました。誤解を恐れずに言うと、私たちは今の小平グラウンドでは、試合をしたくありません。普段の練習で磨いてきた技術や戦術が、発揮できる環境ではないからです。

私たちは現在、ほとんどすべての練習を外部の人工芝グラウンドを借りて行っています。実際にリーグ戦が行われる環境に適應するため、そして何より技術や戦術面の向上を図るためにです。環境のせいにはしたくはありませんが、この部が今後東京都1部に昇格し、さらにその上を目指していくために、人工芝のグラウンドが欠かせない要素であることは間違いありません。

ここまで偉そうに書いてしまいましたが、上記のような事実は現役・OBを含め部にかかわる全員が認識していることと思います。しかし現実には莫大な費用が掛かることや、小平グラウンドのサイズ、ほかの部との兼ね合いなど様々な課題があり、人工芝化実現は非常に困難です。幹事の方々の尽力で人工芝検討の幹事会が開催される等、プロジェクトは動き始めていますが、大きく進展はしていないと思います。

そこで必要なのが、人工芝化の必要性を誰よりも強く感じている現役にのアクションです。これまで現役はOBの方の動きに期待するだけで、ほとんど何もアクションを起こしてきませんでした。最も注力すべきはプレーであり労力を割くのは大変であることは事実ですが、それでも何かを始めないと状況は変わらないでしょう。そして人工芝化の必要性を、その身で感じた上で西松会会員となっていく私たちの責任は殊更に大きいのかもしれません。これまでOBの方々に推し進めてきていただいた人工芝化PJを、今度は現役が動かしていけるよう意識を変えていこうと思います。

リーグ戦を観戦して

リーグ戦 観戦記

清水 征四郎（昭41卒）



2015年度の東京都2部リーグ戦（春期 / 秋期 各9試合 計18戦）を振り返り、現役の試合の観戦記をと思うが、記録をとっている訳ではないので詳細を記すことは不可能ゆえ、観戦した印象を下記の通り記すこととしたい。

1. 全体の結果

本年度は17試合を観戦したが、従来以上にリーグ全体のレベルが上がってきたようで、試合そのものも観戦していて楽しめるレベルの接戦が多く、またOBの応援も例年以上に多くて多くて盛り上がった印象であった。結論を言えばタラレバになってしまうが、最終節の成城大に（大接戦で4対5の逆転の敗戦）勝っていれば3位で1部昇格であった事を考えると、誠に残念であった。通期では9勝8敗1分、勝ち点28、得失点差プラス9で5位となり、来年度も東京都2部で1部昇格を目指す事となった。2部から1部へは、東京経済大学（一橋は今期2敗）、帝京大、東大（共に1勝1敗）の3校が昇格することになった。

2. 前期リーグ戦

第4節までは出足悪く1分け3敗で、強い上位校に敗れたのは止むを得ないとしても、終盤に第7位の玉川大に2対4で敗れ、また第9位の創価大に1対1で引き分けたのが、最後まで大きく響いた。第5節から第9節までは3勝2敗で多少持ち直したが、上位校との敗戦は別として第6位の日大生物資源に1対2で敗れたのが痛かった。前期を終えたところでは正直のところ2部に残留できるか3部降格かと不安を持つような結果であり、夏合宿で頑張ってチーム力を向上させて欲しいと期待する気持ちが強かった。

3. 後期リーグ戦

合宿を終え後期を迎えたチームは、前期と比較して身体の動きもボールの動きも相当レベルアップした感じで、再開後第4節目の首位東経大戦では敗れたものの、それ以外のvs玉川大 3:1、vs創価大 4:1、vs東大 4:1、vs武蔵大 6:1と快進撃し、1部昇格を充分期待させる展開であった。痛かったのは第6節の日大生資戦 0:2で、春と同様の敗戦であった。その後も首都大に4:0、次節は最終的に2位となった帝京大に2:0で勝利し、最終戦の成城大に勝てば1部昇格の可能性大というところまで盛り上がった。

最終節は日が短い11月1日に行われ、試合の最後の方は薄暗いような東工大グラウンドにて成城大と対戦した。多くのOBの応援もあって盛り上がり、終始リードする展開で好試合ではあったが、残念ながら逆転され、4対5の敗戦で終わった。

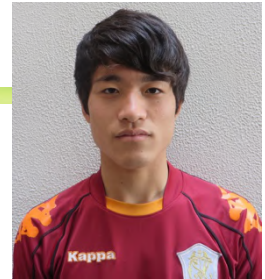
4. 今後の課題

今年度の試合を観戦して感じたことは、強いチームと対戦する試合の方が、むしろ動きも内容も良い試合であったということ。同レベルか下位のチームとやると、余裕を持とうとする為か、ボールポゼッションを良くしようとする余りスピードと思い切りの良さに欠け、決定機がなかなかできなくなる傾向にある。また多くの試合で見られたことだが後半になると、運動量との関係もあると思うが、大事に行こうとして足元へのパスが多くなり相手の裏を狙うパスが少なくなる為、逆に狙われて相手のペースになり苦戦を強いられる事が多かった。また全般的に言える事であるが、大事にしようと思いつぎ余り思い切りの良さがなくなり、シュートが少なくなる。部員数が過去より大幅に増加したのだから、激しい競争を通してチーム全体の力を向上させて欲しいが、他校と比べれば個人個人の實力差はやはりあると思うので、人並みの事だけをやっていては更に上位を狙うのは難しいと思う。従ってボールポゼッションを高めて試合を有利にという考え方よりも、攻撃に転じた場合には、思い切りの良さで決定機を如何に作りシュートに繋がれるかに重点を置く方がベターと思う。この点は2014年のW杯の結果からみても言える事であり、最近の傾向ではないだろうか。いずれにせよ今年度を通じて1部昇格の可能性とチームの課題もはっきり見えてきたので、来年度の頑張りと良い結果を期待したいと思う。

戦いを終えて



蓮池 就介 (4年 主将)



昨年の11月1日をもって、私はア式蹴球部を引退しました。入部したことが遠い昔のように感じられます。それほど自分にとっては長い4年間でした。振り返ると、思い浮かぶのは勝利の喜びではなく、負けた時の悔しさや、うまくいかないときの腹立たしさ、惨めさばかりです。自分たちの代は、結局、何ひとつ成し遂げることができませんでした。4年間で大切な試合は、ほぼ全て負けました。最終節の敗戦が、自分の4年間を象徴していると思います。結果的に、成城に勝っていれば1部昇格でした。おそらく、それまでの過程すべてが肯定されていたと思います。試合自体も紙一重でしたが、残るのは負けたという事実だけで、決定的に足りないものがあったのだと思います。

チームのみんな、特に後輩たちは本当によく戦ってくれました。人数が増え、組織が変化する中で、たくさん無理をさせてしまいましたが、それでも最後まで今年のチームの結果に真摯に向き合い、努力してくれました。心から感謝しています。足りていなかったのは4年であり、そして主将の私の人間としての力でした。運という要素を持つ結果を引き寄せるだけの努力であったり、周りを巻き込み前に推し進めるほどの確固たる信念であったり、これという言葉にすることはできませんが、目標に足るものではありませんでした。そんな失敗ばかりの部活生活でしたが、それでも今の自分は4年前と比べ選手として、人間として一回りも二回りも大きくなることができて感じています。それは良い時も悪い時も未熟なりに現実から逃げず、あがいてきたからだと思います。1日も投げ出すことはなく考えて行動できたことは誇りに思っています。一橋大学ア式蹴球部という環境がくれた誇りです。この組織は、いい意味でも悪い意味でも特殊な組織だと引退してみて感じます。監督がいなくてではなく、もっと精神的なこと。思い込みが激しくて、目標に誠実です。多分、悪いところも、たくさんあります。しかし、自分は今後の人生の礎を、この組織に作っていただきました。感謝してもしきれないです。

最後になりましたが、この伝統ある部を作り上げ、4年間私たちの活動を支援してくださったOBの皆さま、本当にありがとうございました。皆さまの熱のこもった声援に応えることができなかったことが一番の心残りです。しかし後輩たちが、この部を東京都1部、そのさらに上の舞台へと導いてくれると信じています。自分も立派な社会人になり、支えていければと思います。



決意と感謝

金田 大樹 (4年 GM)



まずは昨シーズン、OBの方々には多くのご支援ご協力をいただき、本当に感謝しております。最終節はもちろんのこと、チームがうまくいっていた時期だけでなく、苦しい時にこそグラウンドに顔を出していただいたり、外でお会いしたり、あるいは小平通信などで結果をご覧になってくださったOBの方が数多くいらっしゃいました。皆様が私たちの1番のサポーターであったからこそ1年間チームは強い気持ちを持って戦うことができました。本当に感謝しています。その感謝の想いを昇格という形で示すことができず、自身の力不足を情けないと思うと共に責任を痛感しております。

今シーズン、チームのメンバーは本当によくやってくれました。

例年になくハードな合宿を乗り越え、自ら思考し行動することを課したことで、自信を持って後期リーグを戦いました。リーグ戦だけでなく、Iリーグやサタデーリーグでも思い出に残る試合がたくさんできました。だからこそ最終節が悔やまれます。前期東大戦の89分の失点が悔やまれます。あと1つ、どこかで自分たちが違うアクションを起こしていたら、結果は必ず変わっていました。そして、それは僕に大きな責任があると思っています。全部の責任が僕にあるというほど大げさなことは言えません。でもチームは、リーダー以上の組織にはなりません。スタッフを含めたこのチームの上限は、僕になります。リーダーである僕が変わり続けることや挑戦し続けること、そして未熟さを受け入れ、謙虚にひたむきに頑張りを続けることが足りなかったのが、今年の結果だと思います。そしてもちろん、これは僕だけでなく多くのメンバーがそうです。

とはいえ4年間を振り返り、このチームでは多くのことを学び、反省し、そして次に生かしてきました。全ての人が立ち止まる暇もなく今の全てを受け入れ、この経験を次なる戦いへと生かす準備をしなければなりません。

チーム、育ててもらった両親、そして仲間に対して、自分がいただいた以上の

「恩返し」をすることはもちろんのこと、今後社会人として働く上で熱意と誠意を持ちながら、仕事を通じて人と社会に元気や潤い、そして感動を広げていけるように頑張ります。

改めて4年間、お世話になりました。今後とも一橋大学ア式蹴球部を応援していきましょう。よろしくお願いします。



充実の4年間

青木 嵩 (4年)



今までサッカーを通して関わってくれたすべての人々、サッカーができる環境を作ってくださったOBの方々、本当にありがとうございました。入部したての何も知らない、何もできない1年生の頃と比べると、本当に色々な事を学びました。有意義な4年間でした。苦しいことの方が圧倒的に多かったけれど、それも含めて幸せで充実していました。なぜなら本気だったからこそ自分の弱さや至らなさに絶望したり、それを乗り越えていく楽しさを味わえたからです。心に残っているのは、2年上のGM川副さんに言われた“お前のサッカーは、お遊びサッカーだ”という言葉と、1年上のGM小泉さんに言われた“お前のプレーは見ていてつまらない”という言葉でした。とてもショックだったけれど、同時に自分の事を厳しい目で見ていてくれる、裏返すと、期待してくれている言葉なのだと僕は受け取りました。自分に本気で関わってくれる人たちがいたからこそ、感謝の心や反骨心で僕は4年間頑張れました。

今年は10番を背負いました。何もできませんでした。

チームに残せたものは限りなく小さかったと思います。もともと無謀なチャレンジだとは分かっていたし、周りも感じていたと思います。ただ自分が下した決断に、1ミリも後悔はありません。後悔があるとしたら、もっとたくさんの部員と深く関わりたいかったということ。今年は自分の事でいっぱい、同期や特に後輩と、あまり深く関わることはできませんでした。上記の川副さんや小泉さんだけでなく、多くの先輩が僕にサッカーだけでなく多くの事を教えてくれました。僕も同じように自分の経験を還元したかったし、するべきでした。難しさはありました。今は部員も増えて一人一人と向き合う時間が減りました。だからこそ学年の枠を超えて、もっと密にコミュニケーションをとるべきです。これからの一橋ア式の歴史を創っていくみんなには、先輩、後輩関係なく本気でぶつかり合い、成長してほしい。そんなチームを僕は応援したいです。

これからは、みんなが本気になれる環境を提供するたくさんのOBの1人として頑張ります。今までたくさんの失敗をして、今年は人生で一番大きな失敗をしたけれど、それを生かすも殺すも自分次第。この経験を活かして次のステージでは皆に何かを伝えられるようになります。また会いましょう。

● 虚しさ感謝

岩永 章佑 （4年）



この部に入部した日のことは、今でもよく覚えています。

冗談っぽくも嬉しそうに私に握手を求めてきた先輩のふざけた顔や、普段はクールな先輩がフランクに話しかけながら一緒に2人1組のトレーニングをしてくれたことや、根気強く私を部に誘ってくれていた同期がニヤニヤしながら「やっと入ったか」と言ってくれた瞬間は、今でも鮮明に思い出されます。その日の練習はとても楽しく、思えばこの日から私はもうすっかりサッカー部のことが好きになっていました。自分を温かく迎えてくれた一橋大学ア式蹴球部には感謝の気持ちでいっぱいです。

もともと私は感謝するということを大切にしているサッカーをしてきました。

チームメートに、コーチに、応援してくれる人に、対戦相手に、家族に、自分がサッカーすることに関わる全てに感謝してプレーをすること、これは自分がアスリートとして、そして人間として当然のことだと考えています。その思いは入部の日を機に、より強くなっていきました。そしていつしか、自分が一橋大学ア式蹴球部に示す最大の感謝の証であり恩返し、1部に昇格するチームを作ることに関与すること、そして1部に昇格することであると考えようになっていました。自分はプレーでチームを引っ張ったり、キャプテンシーを発揮するようなタイプではないので、自然と立場や役割としては、チームとしてのベクトルが、ある程度整うように細かなことに気を配り、修正していくことに努めるようになっていました。このようにしてチームに貢献してきたつもりでした。

秋季リーグの帝京大学戦は、私が経験した中でも

本当にベストゲームと言っているものです。負けたら1部昇格の可能性が潰えるという中で、全現役部員が、あらゆる面で決定的に相手を上回り勝利を手にした試合だったと思います。この試合を終え、最終節に昇格の可能性を持った状態で臨むことができると決まったとき、私は1部に昇格するチームを作ることになんとかでも寄与することができたと本気で思いました。このチームは良いチームだ、このチームならば昇格できる、と。もちろん他力本願な部分もありましたが、自分たちがやってきたことは間違っていない、これまでの歩みを信じていけば最終節で勝てる、そういう風に考えていました。

ご存知のように私たちは最終節で敗れて昇格を逃しました。
これは私にとって先のような考えに対する全否定のような現実でした。
昇格という形が残らなければ、それは何も残らなかった、何もしなかったのと同じ。
自分がやってきたことは間違いだったのか、今までしてきたことは何だったのか。
私が感謝したい人たちに対して申し訳ない、どうしてもそのように考えてしまうことがあります。
私がこの部にいてもいなくても同じだったのではないか思うことさえあります。あの日から
私の中にある虚無感を、とにかく後輩たちには誰ひとり味わってもらいたくありません。

楽しい時間もつらい時間もたくさん過ごしてきましたが、
最後に虚しい思いをした分、これからは OB として諸先輩方と共に
現役部員たちを温かく見守り、そして応援していきたいと思っています。
最後になりますが、共に過ごした同期、先輩方や後輩たち、並木さんや大儀見さんなどの
トレーナーの方々、赤星監督、西松会 OB の諸先輩方に、この場を借りて感謝申し上げます。
本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いいたします。

この4年間で学んだこと

大塚 幸司 （4年）



改めてワードの画面を目の前にすると、何と書き始めていいか頭を悩ませる。「戦いを終えて」ということであるが、23 年間の中の15 年を占める自分のサッカー人生の中で、これほど公式戦に出られなかった4 年間はない。それはもう取り返しのつかないことではあるが、「ひとりの選手」として、何とも形容し難い気持ちになる。1 年目は40 人ほどのチームだったのが4 年目には約70 人もの大所帯となり、公式戦出場はおろかベンチにすら入れない選手の方が多くなった。この点で、きっと僕と同じような4 年間を送る選手も多くなるのではないかとも思う。しかし、それでもこの4 年間は、先輩方の背中からたくさんの気づき・学びを得て、「ひとりの人間」としてはかけがえのない財産になったと思える。いつ死ぬことになるかはわからないが、この先の約60 年の中でも大きな4 年間になったのではないかと思う。そのような感謝の思いを持ってこの4 年間を振り返りながら、学んだことをいくつか述べていこうと思う。

凄まじい行動力

最初はこれである。とても抽象的な言葉だが、“できない理由を考えるのではなく、どうしたらできるかを考え行動する”と言い換えられるかもしれない。そして僕の見てきた先輩方は、その肝心の「1 歩目を踏み出す勇気」を持っていた。

1 年目のシーズン4 連勝の後に4 連敗で昇格を逃したのだが、当時の GM 平林さんや中村さんは『スラムダンク勝利学』を著した辻秀一先生に会いに行き、僕たちのメンタルトレーニングの指導をお願いした。また現在大儀見さんのサポートを得られているのも、昨年の GM 小泉さんによるところがとても大きい。並木さんもまた然りである。普通ならというか当時の僕の感覚では“プロの人のサポートなんて・・・”というものであったが、実際にその道のプロの方々に直接連絡を取り協力を得るところまでやってしまう、その行動力は僕にはないものだったので、とても衝撃的であり、“やっぱり先輩はすごいな”と思わざるを得なかった。加えて現役部員の中には、小泉さんが JFA の S 級ライセンス講習会の通訳をしていたことを知っている人も多いと思うが、これもまた1 歩目を踏み出すには相当の勇気があるように思われる。“周りは元 J リーガーばかりだし”とか、“確かに帰国子女だけど・・・”とか、“大変そうだから”とか、いくらでもやらない理由はすぐに見つかるが、進んでそのような環境に飛び込み、後輩の僕たちに満面の笑みで“こんなことを学んだんだ”と話してくれる。こんな先輩方には“到底かなわないなあ”と思わされると同時に、自分も“やってみよう”、“行ってみよう”と思ってしまうのである。

常にチーム全体を考えている

これは言葉にすると少なからず軽くなってしまうところがあるが、体現するのは非常に困難なことのようには僕は思う。このチームの伝統の1つとして、自分ひとりが活躍してもチームが勝たなければ意味がない、仮に自分が試合に出られなくてもチームが勝てば・・・という価値観を是としていると思う。そして、特に上級生になればその意識が高まると言われている。しかしFWとしてプレーする僕は、試合に出てなんぼとか、試合に出ても結果につながるプレーができなければ自分に価値を見出せないと考える質であるがために、チーム全体のことを心の底から思うということが、とても大変であると感じているし、自分は及ばなかったと思っている。

自分のやるべきことを全力で

日々、年々変わる自らの役割を正しく捉え、その役割を全うすることが、このチームで果たすべき責任の1つであり、辻先生のメンタルトレーニングで学んだこととも大いに重なっている。

過去は変えられない。未来はわからない。

だからこそ、今この瞬間を100%生きる。今に生きる。

そう考えて自分の心を「Flow」にすることで、自分の行動の質が高まり、より良い結果がつかめるというものだ。

マネージャーは目の前の仕事にすべてを注ぎ、ケガ人は目の前のリハビリにすべてを注ぐ。選手一人一人は目の前のプレー、次のプレーのことを、ただひたすら考え、走る。

・・・レイモンド・フェルハイエン『Football braining』（サッカー心理学）も検索してみてください。

ベンチ外で応援している選手は、ただ声を張り上げてピッチの11人を支える。

ベンチ外を悔やみ不貞腐れている暇なんてないし、疲れたと膝に手をついてる暇はない。

でも僕はベンチ外だったり試合に出られなかったりすると、どうしても不貞腐れてしまうことがあるからこそ、そのように「今に生きる」ことの難しさみたいなものを感じている。それでも僕の見てきた先輩方は、みんな今に生きていた。入場するときの「君が代」で、声を張り上げる大山さんや宮村さん。メガホンを持ってリズムを取りながら応援歌を歌う満井さん。悔しさとかを見せることなくチームの勝利を祈って応援していた、その姿を思うと、“すごいな”の一言しか出てこない。

内村鑑三は『代表的日本人』という本の中で、
二宮尊徳にまつわる以下のようなエピソードを記している。

ある村で尊徳が農業指導を行っていた。

そこで働く者の中に年老いて人並みに働くことができない男がいた。

彼は他人が休んでいる間も、ただひたすら木の根っこを取り除くという作業を続けていて、

“根っこ取り”と呼ばれて蔑まれていた。“根っこ取り”は、根っこを取るこそ

神が自らに与えた使命であるとしていた。そんな彼を尊徳は評価し、農民の前で称えた。

これをテレビで見たときに“まさにこれだ！”と思った。

上記の先輩方はみんな、当然いい意味で、“根っこ取り”だったのではないか。

彼らの背中を見て学んだ

「チームの勝利のために勇気をもって1歩を踏み出し、時に自己犠牲を払い、

目の前のやるべきこと・自分に与えられたことにすべてを注ぐ」

という姿勢は、今後の社会人・企業人人生の根幹たるべきものである、と思う。

4月以降、天から、会社から、どのような仕事を与えられるかはわからない。

きっと泥臭く厳しい仕事が続いているに違いない。しかし、この4年間で得た姿勢を
大いに発揮し、組織のために、会社のために、自ら進んで誰もが避けるような仕事にも
勇気を持って率先して取り組み、結果を出していきたい。

そうすることで、さらにこのチームでの4年間で輝きを増すのだと思う。

最後に、一橋大学ア式蹴球部に関わる全ての人のご支援あつての、この4年間となります。

これほどまでに充実した4年間でくださり、本当にありがとうございました。

戦いを終えて

小笠原 健太 （4年）



戦いを終えて、自分は本当に貴重な経験をさせていただきました。
それはおそらく一橋大学ア式蹴球部でしか経験し得ないものだった
と確信しています。サッカー部でありながら、ただのサッカー部ではない、というのが
一橋ア式の最大の特長だと思っています。サッカーだけやっていれば良いというわけではなく、
もっと根本的に考え、自分なりの行動規範が要求される世界です。そこに一人ひとりの裁量が
あるからこそ面白く、強みにも弱みにもなり、大きな可能性を感じることができます。

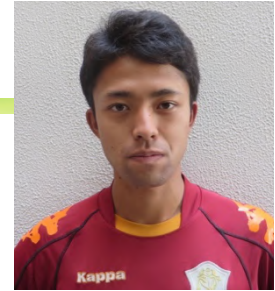
しかしながら自分が個人として、或いは自分たちチームとしても、結果を残せなかったのは、
ちゃんとサッカーそれ自体と十分に向き合えていなかったからだと考えています。
様々な困難があって、それについて頭を巡らし、試行錯誤することは確かに自分たちが
強みとしていることですが、それに囚われない姿勢というものを後輩には期待しています。
純粋な心持ちでサッカーをするときに最も実力を発揮できるというのは、
皆が経験してきたことだと思いますので。

最後になりますが、このチームを支援してくださっている OB・OG の方々には
心より感謝申し上げます。自分たちが、いかに多くの人に支えられた上でサッカーをしているか
ということを知ることができただけでも、一橋ア式でやってきた意義があると思っています。
今後は自分も1人のOBとしてこの部の飛躍を願い、現役の活動を陰ながら応援していきたいと
思っておりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



サッカーとア式蹴球部と私

小島 秀太 （4年）



2015年11月1日、これほどまでに、あっという間に感じた

「90分」は初めてでした。ここで勝てば1部昇格もあり得るという状況にあったため、正直いつも以上に緊張していて、それが時の流れを早く感じさせる一要素だったのかも知れません。しかしそれよりもピッチの上では、これが正真正銘、最後の戦いで、これと同じ経験を、この仲間たちとはもう一生できないという考えが、ふとした瞬間に嫌でも脳裏をよぎり、目の前の相手に勝つことだけに集中すべきと分かっている、どこか試合の1分1分を惜しんでサッカーをしている自分がいました。とにかく試合が始まってからの時間があっという間で、気づいたらベンチに下がっていて、気づいたら惜敗していて、気づいたら帰路に就いていました。何かフワフワした気持ちが、その日中続きました。これが、あの日の僕の率直な感想です。

なぜ大学に入ってまでサッカーを続けるのか・・・これは今まで僕が自分に投げかけてきた問いであり、恐らく部員皆の問いでもあると思います。現役部員として活動している最中にはこの問いに対する答えを出すことはなかなか難しかったですが、引退した今なら、はっきりと言えます。それはサッカーというスポーツを通してギリギリの戦いにチーム一丸となって勝ち、苦楽を共にしたチームメイトや応援してくださっているOBや関係者の方々と共に喜びを分かち合う瞬間が、たまらなく好きだからというものです。これ以外の答えは僕の中にはないです。だからこそ秋季最終節の成城戦で敗れて1部昇格を逃し、最後の最後に皆と悔しさを分かち合わなければいけなかったあの状況がたまらなく辛く、現実をすぐには直視できなくて、仮想世界にいるようなフワフワとした気持ちだったのだろうと、今振り返ると思います。

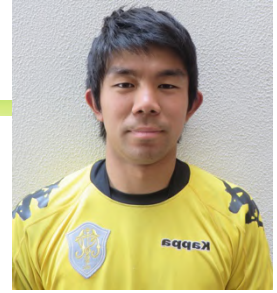
最後に2つ言いたいことがあります。1つめはOBの方々に對してです。

緒方さんを始め、多くの方が毎試合のように会場に足を運んで応援をしてくださり、勝った時も負けた時も僕たちのそばに寄り添ってくださいました。本当に心強くて、毎試合後涙が出そうになったのを覚えています。また会場に行けなくとも陰ながら応援してくださった方々が、たくさんおられることも承知しています。僕たちはOBの方々の期待に応えるべく戦っていると言っても過言ではないくらいでした。心から感謝申し上げますと共に、これからは同じOBとして現役の活動を全力でサポートしていく所存ですので、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。2つめは現役部員に對して。いろいろと考えるべきこと、やるべきこと等あって意外と難しいことかも知れないけれど、サッカー部にいるからこそ全力でサッカーを楽しんでほしい。1回1回の勝負を心から楽しむこと、それを一番大切にしてほしい。引退した今、僕は心からそう思っています。とにかく仲間と共にサッカーに打ち込んでいる一瞬一瞬を日頃から楽しんでほしいです。そして、先輩たちや僕たちの代が果たせなかった1部昇格を実現してくれることを切に願っています。



サッカーへの情熱

後藤 守 (4年)



4年間を振り返ってみて、この部活で得ることができたものはたくさんありますが、その中でも一番かけがえのないものといえば、それは自分のサッカーに対する情熱です。私は一橋大学に入学してア式蹴球部を選んだ時、それほど情熱を持っていたわけではありませんでした。幼稚園からサッカーをやってきたのでやっていない自分を何となく想像できないし、大学から他のスポーツ始めるのも面倒くさいしという、ある種消極的な理由でこの部活を選びました。そして入る前は一橋大学だし部活だけど緩い感じでやっていて、そんなに強くないんだろうなとまで思っていました。いざ入ってみたら周りはサッカーが大好きで、ひたすら真摯にサッカーに取り組む同期や先輩ばかりでした。最初は正直ついていけないやと思ったことを覚えています。そんな半端な覚悟しか持っていないのにリーグ戦に出させてもらっていた自分は周りの本気で取り組むプレイヤーに対して気持ちの面で負い目を感じながら、せめて自分のせいで負けるようなことはないように頑張ろうという情けない理由でサッカーに取り組んでいました。

そんな調子でやってましたが、いつ頃からか周りのみんなに触発されてサッカーを本気で楽しみ、取り組んでいる自分に気付きました。高校までのサッカーでは味わったことのない感情をたくさん経験しました。本気でサッカーに取り組む楽しさ、本気だからこそこの試合に勝った時の嬉しさ、負けた時の悔しさ、どれもこの部活に入ったからこそ味わえた、かけがえのない感情です。最上級生してプレーしたこの1年間は、4年間で一番楽しい1年間でした。全ては本気でチームのことを思いながらもサッカーの楽しさを決して忘れなかった同期たちや、私たち4年に対する不満もあるだろうに最後まで付いてきてくれた後輩たち、そして試合の度に遠方からでも観戦に訪れていただき、時には練習にまで顔を出して激励してくださったOBの方々のお陰です。

私はどんな形であれ、これからもサッカーを続けていこうと思います。これもこの一橋大学ア式蹴球部に入ったからこそ、そう思っているのだと思います。この素晴らしい部活を、これからは自分がOBとして、少しでも現役部員の力になればと、そういった形でこの部活に恩返しをしていかなければなと思っています。私たちが成し遂げられなかった1部昇格、そして関東リーグ昇格という夢を、必ずや後輩たちが、一橋らしく成し遂げてくれると信じています。



後悔はない

榊原 龍斗 （4年）



1部昇格を目指して過ごした4年間、
今年も1部昇格には届かなかった。終わった直後は悔しい気持ちはあったが、今となってはもう、この4年間で振り返って何一つ後悔していないと言える。
悶えるような悔しさとか、そういったものを得るステージに立っていなかったから。

1部昇格という目標のために、本気で情熱をこめて考えられていたかというと、そうではなかった。もちろん、その時その時は全力だったが、それは場当たりのもので、自分が1部昇格に足る選手に、チームになることにつながらなかったものだった。
その場をしのぐのに全力なだけだった。

当時はその場しのぎの全力が1部昇格への全力と思っていたが、戦いを終えてみると、それは見当違いのものだったのだと思う。なんとなくやって、なんとなくできるようになる。今まで人生はそんなものだった、から1部昇格もそうだろうと思っていたのかもしれない。
しかし1部昇格はそんなものではなかった。チーム全員が情熱をもって本気で考え行動していかなければならない。後輩諸君は、こんなことはわかりきっていると思うが、日頃から、この考えとか、この行いが自分の目標につながっているのかを顧みてほしいと思う。



後悔と誇り

竹本 圭佑 （4年）



高校時代、当時県内2部最下位の高校に入学した私は、
2年時から主将としてチームを牽引し、創部80年で県大会初優勝を
成し遂げました。陸上部出身でサッカーの知識がなく、形式上監督を置いているに
過ぎなかったチームが選手主体で試行錯誤し、ただひたすらに目標への挑戦を続けた結果でした。
このような経験から、東京都2部への昇格を果たした翌シーズンに入部した私は、
大学4年間で1部に昇格し、関東リーグへ挑戦することができると確信していました。

ところが、待っていたのは最終節まで残留争いをする現実の厳しさや、
目の前で昇格を逃す勝負弱さと力不足でした。
自分たちには何が足りないのか、勝負を分けたのは何か、自分たちはやれること、
やるべきことをやっていたのか、最大限の情熱をサッカーに注げていたのか、
充実した時を過ごすとともに、多くの時間苦悩しました。
引退して数か月経過した今でも現役時代の多くのことを考え、悔しさがあふれてきます。

しかし私は、この4年間過ごしたア式蹴球部を誇りに思っています。
こんなに苦悩し、悔しさが今でも残るのは、この組織を誇りに思う故だと感じています。
サッカーは今までの私の人生を形成してきたもので、私が一番好きなことです。
その愛するサッカーに、これほどにまで向き合い、
打ち込めた日々を過ごすことができたのは、この組織のおかげです。

自分ひとりでは何もできないと痛感した4年間であると同時に、
様々な方に助けていただいた4年間でした。
両親、OBの方々、先輩方、後輩、そして同期など多くの方々に支えられ、
自分の本気のサッカー人生に幕を下ろすことができました。
本当に素晴らしい環境で、魅力のある組織でした。
このような誇りを感じる4年間を提供してくださった、すべての方に心から感謝しています。
ありがとうございました。

このチームで勝利し、昇格をつかみ、少しでも恩返しができればと思っていましたが、
私の代での東京都1部昇格、関東リーグへの挑戦とはなりませんでした。
しかしア式蹴球部は、まだまだ発展途上の段階で未来ある組織です。
私はOBとして今後のア式蹴球部を楽しみにしつつ、
お世話になった組織のために微力ながらも貢献していきたいと思います。

平成 28 年度シーズンに向けて

🏆 今シーズンの抱負

大口 柁文 （3年 新 GM）



OB・OG の皆さま、いつも変わらぬご支援とご声援ありがとうございます。
今年度 GM を務めさせて頂く、大口柁文と申します。
今シーズンの抱負というテーマで寄稿させていただきます。

一橋大学ア式蹴球部で、私は素晴らしい経験をしています。
全員がすべては 1 部昇格のためにという姿勢を持っています。全員が毎日私の拙い練習を一生懸命に取り組んでくれています。プレイヤーもマネージャーも区別なくサッカーに対して、そしてこの部活に対して真摯です。OB の皆様は常に私たちを支援してくださり、お忙しい中会場まで応援に来てくださいます。どこの誰にお会いしても何ら臆することなく、この部活の活動について誇りを持って話すことができます。

それは、私や現役の力ではありません。

歴代の OB の皆様が脈々と一橋大学ア式蹴球部の伝統を受け継いでくださったからこそ今、私たちがこのような素晴らしい経験をすることができるのです。諸先輩方の時代そっくりだとは申しません。しかし一橋大学ア式蹴球部が一橋大学ア式蹴球部として続いてきた 95 年の歳月、先輩から後輩へ、皆さまから現役へと何か「一橋らしさ」のようなものが受け継がれているのだと思います。GM としてチームを任される立場に立つと、なぜかそのような実感を覚えます。

では、今年のチームは後輩たちに何を残すことになるのでしょうか。

私はあと 8 か月余りで、この部活を引退しなくてはなりません。その僅かな時間で、私は何かを後輩に、この部活に残さなければなりません。先輩から受け継いだボロボロの練習着や、部室の壁に書かれた落書きと一緒に後輩に受け継いでもらわなければなりません。それは態度であり、姿勢です。それは過程であり、結果です。それは、たとえ敗北しても前を向き続けることであり、勝てば全員でもみくちゃになって喜びを表現することです。それは部員一人一人に愛情を持って接することであり、時には納得するまでとことん話し合うことです。そして何より、それは 36 年ぶりの 1 部昇格であり、東京都 2 部優勝です。必ず 2016 年、このチームで達成します。4 年から 1 年まで全員が、この部を強くし続ける部活であり続けます。すべての練習、すべての試合で全力を尽くし、常に挑戦し続けていきます。これが私の今シーズンの抱負であり、また、このチームの目指すべき姿です。来年度の紙面では必ずや良いご報告をさせていただきます。今年度も、どうぞ変わらぬご支援をよろしくお願い致します。

マネージャー長としての決意

山崎 光 （3年 新 MGR）



OB、OGの皆様、いつも暖かいご支援ご声援をいただき、誠にありがとうございます。今シーズン、マネージャー長を務めさせていただくこととなりました、山崎光と申します。マネージャーは私の1つ上の代まで3年生で引退という慣例がございました。そのため、このような場に新4年となるマネージャーが出てくることはなく、マネージャー長という役職もございませんでした。入部当初は、当然私もそれに従うものだと考えておりましたが、同期との仲が深まるにつれ、4年生としてチームを引っ張っていく時に私も同じフィールドに立っていたいと思うようになり、このような運びとなりました。

このチームは私が1年生だった頃と比べて随分変化したように思います。特に昨シーズンは新入生がたくさん加わり部員数は約2倍になりました。マネージャーの人数も私が知る限り3代で過去最多の8名となりました。大所帯とはなりましたが、1つの目標に向かってチーム全員で戦うところは、変わらず大切にしている部分であります。昨シーズンを通して感じたことの1つとして、人数が増えると取り組みの幅も広がり、様々な角度からのアプローチができるようになるということがあります。今シーズンは、これまでの積み重ねを大事にするとともに、新たなチャレンジにも力を入れております。その中で、より一層質の高い取り組みを継続的に提供することが、マネージャー長である私の努めだと考えております。

個人的なことになりますが、私はサッカーが大好きです。

大好きなサッカーに関わることができるという理由で、高校でもサッカー部のマネージャーをしていました。大学では何か新しいことをと思っていましたが、先輩方の1部昇格への熱い気持ち、目標を掲げて全員で戦う姿勢、何より部の雰囲気引き込まれて、即座に入部を決めました。これまでの3年間は非常に貴重な経験をたくさんさせていただきました。

4年生として、マネージャー長として過ごす最後の1年は、このような素晴らしい環境と風土を作ってくださったOB、OGの皆様、直接お世話になった先輩方に感謝しつつ、その想いを部へ還元していきたいと考えております。最後に今シーズン必ずや悲願の1部昇格を成し遂げます。これからも変わらぬご支援、ご声援をよろしくお願いいたします。

東西・西松会有志の会

🏈 関東西松会・シニア有志の会

松丸 鉦市（昭31卒）

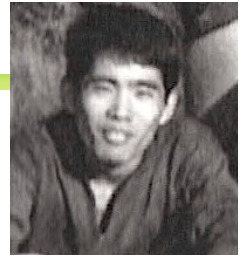


平成27年6月4日に、シニア7名が一橋クラブに集まり歓談する本会が開かれました。出席者は石井（昭30）、志摩・橋本・松丸（昭31）、浅井・佐竹（昭32）、岩坂（昭33）の各氏です。高齢化に伴う諸事情でこの会に参加できる人が年々減ってきています。この現状から今後の集まりをどうするかを問うたところ、「この会館に足を運ぶことができる間は、とにかく集まろうではないか」が総意でした。平成28年は、6月2日（木）に「シニア有志の会」をセットしました。是非の参加を期待しています。



関西西松会のご報告

柴田 暁 (昭 46 卒 パナソニック)



◆三商大戦 (2 月 22 日) 於：神戸大学参加者

嶋田／佐竹 (昭 32)、柴田 (昭 46)、宮脇 (昭 62)

◆春の部 (4 月 23 日) 参加者

嶋田／佐竹 (昭 32)、村林 (昭 40)、柴田 (昭 46)、宮脇 (昭 62)

◆秋の部 (10 月 25 日) 参加者

嶋田／佐竹 (昭 32)、柴田 (昭 46)、宮脇 (昭 62)、西尾 (平 22)

本年は、三商大戦が例年の夏から真冬の 2 月開催となり、各校とも OB の集まりは悪く、OB 戦は行われなかった。試合は対神戸戦は敗れたが、対大阪市大は 1－2 から追いつき逆転、4－2 になった後、1 人退場。市大も必死でメンバー交代で巻き返しを図るも、一橋が逃げ切るという久々の好ゲームだった。なかでも 2 点を取り、ハットトリックはオフサイドで惜しくもならなかった 18 番の金田、神戸戦後半から引続き出場し守備の要であった 7 番の竹本の活躍が光った。竹本が奈良郡山高校出身であることを知った嶋田先輩が、応援席で「今日は帰って、お母さんにステーキでも食べさせてもらえ」と叫んだところ、後ろの席から「私が母です」という声がした。振り返ると、何とお母さんが応援に来ておられたというハプニングもあった。

さて事務局を務められた佐竹先輩のご尽力で続けてきた関西西松会だが、常連の出席者の高齢化が進み、松本先輩 (昭 26) は昼の外出は問題ないが夜の外出は控えておられ、篠宮先輩 (昭 27) は長野県上田市に娘さんが住んでおられ、その近くの「佐久」というところの老人施設に夫妻で入居されるなど出席者が減少してきた。そこで次回 4 月 21 日 (木) 開催をもって、一旦最終回とすることになった。これが最終回となるので、できるだけ多くの参加をお願いしたい。

今後は三商大戦の時、適宜関西懇親会を実施することとし、幹事は不肖柴田が担当することとなった。現役も若干名招待したいと思うので三商大戦日程を早めに連絡いただきたい。今後とも大いにサッカーの今昔談議で盛り上がりましょう。

Selamat tengah hari (こんにちは)

高橋 良多 (昭 51 卒 在バンコク)



マレーシアからお便りをいたします。私は 1976 年に卒業後、三菱商事で 33 年間勤務し、7 年前に関西ペイントに就職しました。1 年 4 ヶ月前にマレーシアに駐在し、現在関西ペイントアジアパシフィックに勤務しています。商社時代のロサンゼルス、バンコク、マニラに続き、ここクアラルンプールが 4 ヶ所目になります。就職後のサッカーとの関わりについて、ちょっとお話させていただきます。

ロサンゼルスにいた 1979 年頃は米国サッカーの黎明期で、ニューヨークコスモスには、最初にペレ、その後にベッケンバウアーが来て選手生活の最後を米国で過ごしていました。私の駐在したロスにはアツテックスというチームがあり、赴任した直後になんとオランダのヨハンクライフが来て活躍するという幸運に恵まれました。当時新婚だった私はゲームがある水曜日には予定をなるべく入れず、ローズボウルという競技場に車で家内と行ってよく観戦したものです。その頃のロスにはまともなサッカー競技場がなく、アメフトで有名なローズボウルをサッカーでも使用していたのです。

バンコク、マニラ時代はサッカーに余り縁がなかったのですが、関西ペイントに入って 3 年目の 2011 年 11 月、私の勤務していた大阪本社の国際本部に 30 cm ほどの立方体の小包が届きました。皆が「時限爆弾では？」と騒いだのですが、恐る恐る開けてみると、関西のロゴとマンチェスターユナイテッド (MU) のロゴの入った黒いサッカーボールが入っていました。そして「Official Paint Partner」と書かれていたのです。ひとつの業界でスポンサーは 1 社と決めている MU が、「関西ペイントにパートナーになって欲しい」とオファーしてきたのです。当時、香川が MU に加わったこともあり、グローバル化を標榜している関西ペイントの知名度アップに生かそうという趣旨で 3 年間の契約を結びました。

マレーシアに来てみると英国プレミアリーグの人気は非常に高く、色々なカフェやパブでプレミアリーグの試合をしょっちゅう放映しています。特に人気の高いのが MU とリバプールで、「MU を塗料販売にうまく利用しよう」と考え、目下 MU と直接コンタクトしてマーケティングについて議論しています。好きなサッカーと付き合ってきて、マレーシアでこのような仕事ができ、巡り合わせというかサッカーとの不思議な縁を感じています。



ちょうどこのお便りを書き始めた昨日、“4月30日にレスターシティとホームで行なわれるプレミアリーグの招待状”がMUから私に届きました。マンチェスターオールトラフオードスタジアムに行ってきます。中学生の頃テレビ番組の「三菱ダイヤモンドサッカー」でジョージベストや、今でも健在でMUの特別顧問をしているボビー・チャールトンが活躍したマンチェスターに足を運べるなんて想像もしていませんでした。

こちらに赴任後すぐにペイTVに加入してプレミアリーグの試合をよく見えています。またMUとタイアップしてどのように関西ペイントの知名度を上げていこうかと、仕事の方でも色々な構想を頭の中で思い巡らしながら楽しい毎日を送っています。サッカーと関わっていてホントに良かったと、この歳になって改めて思う今日この頃です。



どっぷりイスタンブール

村上 浩三 （昭 61 卒 三菱商事 トルコ・イスタンブール）



今回2度目のイスタンブール駐在です。10年ぶりのトルコに赴任してきて8ヶ月が過ぎました。着任日に、空港から当面の居住場所となる市内のホテルに向かう車の中から眺める景色は、懐かしいものでした。

離日前に「久しぶりのイスタンブールは相当変わっているよ」と、イスタンブールを良く知る皆様から言われて来ましたので、「意外と変化ないな」というのが最初の印象でした。

しかし、この印象は間違いであった事が翌日の生活から次第にわかり始めます。まず第1に大変な交通渋滞です。確かに前回駐在時もかなりの渋滞はありましたが、ここまでひどくなっているとは・・・通勤ラッシュ時の事務所周辺は全く動かない、面談先に車で移動するにも時間の計算が全くたたない、渋滞時に空港へ行くものなら、普段であれば30分そこらで到着できるところが2時間以上もかかってしまう、といった具合です。

次に高層ビル群の林立です。前回離任時に高層ビルは立ち並び始めていましたが、その数たるや想像をはるかに超えるものです。市内のあちこちに高層ビル群が出現しています。事務所周辺もその様相をすっかり変えていました。イスタンブールはボスポラス海峡を挟んで欧州側とアジア側に分かれています。かつての中心部は欧州側に固まっていたのですが、アジア側にも金融センターを始めとした様々な商業区域が開発されています。アジア側のマルマラ海沿いを車で走った時には、まるでマイアミ・ビーチを走っているんじゃないか？といった感覚すら覚えました。

交通渋滞に高層ビル群は、どれも勢いあるトルコ経済成長の証とも見てとれます。それは、これまた街のあちこちに出現しているショッピング・モールにも感じられます。高級ブランド店が軒を連ね、色々な種類のレストランにはお洒落な人たちが食事と会話を楽しんでいます。2～3箇所しかなかったモールが一体いくつ出来たのか、未だ全部を把握しきれていません。更に建設は現在進行形で進んでいます。この消費意欲はどこから湧いてくるのか、不思議な感じです。

ゴルフ場にも変化がありました。ゴルフ場そのものは数も場所も変わっていないのですが、変わったのはプレーヤーです。日本人、韓国人が常連なのは万国共通。イスタンブールでも、以前は、ほとんどが日本人と韓国人でしたが、今回驚いたのはトルコ人プレーヤーの多さです。聞けばトルコ人・日本人メンバーでのコンペも定期的に開催されているらしいのです。ゴルフが下手な私は、ノロノロしていたら後ろの上手なトルコ人の組から打ち込まれてしまいました。それからトルコ少年がプレーしているんです。これがまた上手いし、良く飛ぶ。こんなゴルフ場の風景は、前回では考えられませんでした。

一方で、これら経済発展の副産物とも言えると思いますが、貧富の格差が益々広がり、治安も悪くなっているように感じます。日本領事館からは、かなりの頻度で発砲事件等の注意喚起が出ます。ISやクルド系過激派組織のテロは警戒するんですが、テロとは関係ないところでの発砲事件の多さは前は感じられなかった事です。つい先日も、日本人学校の前で暴力団同士の銃撃戦があった際には肝を冷やしました。良くも悪くも、この10年での大きな変化を感じるトルコ、イスタンブールです。これからの駐在生活を公私に渡り充実したものにすべく、トルコの生活にどっぷり浸かっていきます。



ニュージャージー 少年サッカー事情

川上 耕（平4卒 パナソニック 米国ニュージャージー州）



久しぶりに当時の主将から連絡が来たと思ったら西松会新聞への寄稿依頼だった。正直に申し上げるが、西松会新聞の存在すら存じ上げなかった。

非常に恐縮である。早いもので大学を卒業して20年以上が経過してしまった。その間、勤務先が神奈川だったり、度々海外勤務を命ぜられたり、等々の口実で、すっかり小平から遠ざかってしまい、現役・OBの皆様には失礼をしている。その罪滅ぼしの意味もこめて、近況をしたためてみようと思う。

私は2014年8月から米国ニュージャージー州のパナソニック（株）販売会社に出向している。アメリカ勤務は2000年から4年、2010年から2年に続き、実はこれが3度目で、勤務地は3度とも同じニュージャージーである。仕事はAV / ICTの業務用・プロ用機器を中心としたBtoBソリューション事業を担当させていただいている。当社も巷の日本の電器メーカー同様、何度かの経営危機を経験しながら家電からBtoBへ軸足を移すことで活路を見出そうとしている。米軍や警察向けに納入している落としても叩いても壊れない「堅牢型」パソコンや、皆さんが出張時に乗る旅客機で映画やフライト情報を見る際に使う機内エンターテインメントシステムなど一般にはあまり知られていないが、その業界では圧倒的なシェアを持っている事業もある。日本の電器メーカーの苦戦が伝えられて久しいが、日本のメーカーがまだ戦える、いわば隙間を見つけて、なんとか社会のお役にたちたいと頭を悩ます毎日である。

生活の方は、妻、中学1年の長女、小学4年の長男の家族4人で、ニュージャージー州北部のテナフライという小さい静かな街で暮らしている。子供たちは2度目の赴任時から、この街で現地校に通っている。父親の仕事の都合で急にアメリカに連れて来られ英語も全く解らないまま明日から現地校に通えと言われたら、子供時代の私ならどんなに嫌がっただろうかと思うのだが誰に似たのか二人共そこは図太く、毎日たくましく学校に通っており、口には出さないが、結構感心している。もちろん妻の努力もあるので、そちらにも感謝しなければいけないのだが。

アメリカでは、小学生・中学生のスポーツチームが街で自主運営されていることが多く、種目もアメフト・バスケ・野球の他、サッカーもある。こうした街主導のサッカーチームは最近では日本でもよく見かけるようになったが、アメリカではごく普通で、ボランティアでチームの面倒を見る親やコーチも組織されており、運営もしっかりしている。ご存知のように、アメリカではサッカーはトップスポーツではなく、どちらかということ子供たちのスポーツという位置づけであったと思うのだが、最近は少し変わりつつある。メジャーリーグサッカーや女子W杯と一般にも人気が上がってきたことに加え、中南米系の移民が増えたことも理由の1つかもしれない（あくまで私見）。

テナフライにも Tenaflly United というサッカーチームがある。

大きくは「リクリエーション」と「トラベル」という括りがあり、「トラベル」は付近の街との対抗リーグに出場し、中学のトップチームになるとイタリアなど海外にも遠征したりする。

「トラベル」には春・秋にそれぞれトライアウトがあって、ここで選ばれた後、技量に合わせて各学年の中で A / B / C などのチームに振り分けられる。2015 年秋のシーズンは学年別・男女別に実に合計 26 チームがあり、シーズン中は週 3 回の練習と週末の公式戦を行っている。小学 4 年の息子も今年初めてトライアウトを受けて、小学 4 年の B チームに所属した。この秋は毎週土曜日に試合があり、土曜の補習校（日本人学校）を遅刻・早退させて私が車で送り迎えをしていた。近く of 街との対抗戦とはいえ、時には車で 1 時間以上かかる街での試合もあり、親の支援が必須である。

息子は日本でも低学年の頃から近くのサッカーチームに入っていたのだが、平日に練習と紅白戦をやって、土日は活動しないチームだったので、息子がチームの中でどのようなプレーをするのか見たことがなかった。今回、初めて息子の試合を見たが、正直私の想像以上にプレーできることに驚いた。私と日本の公園でパスを交わしていた頃と比べ、特別なトレーニングを受けなくても、普段ボールで遊んでいる中から自然とボールタッチや蹴り方を覚えて、自然に、しかし急速に上手くなっている。変な気負いはなく素直に好きなサッカーをやっている中で上達していく。それに加えて、息子がチームの仲間ととても楽しそうにボールを蹴っているのを見て、自然で理想的なスポーツの形に思えた。アメリカでもサッカーをやらせて良かったと思う。今度の春のシーズンは A チームに入るのだと意気込んでいるので、貴重な休日の送り迎えは嫌ではあるが、次のシーズンもつきあってやろうかと思っている。



思い出の数々

神代 祥夫（昭 29 卒）



☆はじめに☆

人の一生というのは何処まで続くのだろうか？

間もなく米寿を迎えるトシになりました。私がボールでプレイを始めたのは、小学 4 年生の時でした。千葉県北条小学校（現在の館山市）から中国・青島市の日本第一小学校に転校してからでした。何しろ校庭は 400m のトラックが確保できる広さがあり、冬になると 3 面のサッカーゴールが建てられていました。今では小学生からのトレーニングは当たり前ですが、80 年も昔にこういった設備のある学校は稀だったと思います。従って学年を越えたチームの交流が盛んに行われていました。これが私のサッカーとの繋ぎの始めです。

☆中学・高等学校時代☆

昭和 18 年に山口県立山口中学校（旧制）に入学しました。

外国での割合にゆっくりとした気分とは異なり、国内は緊張の度合いが強く農作業の勤労奉仕もあり、「球技」は一切なしでした。昭和 20 年 3 月末からは学徒動員令の一環として工場労働もしました。昭和 20 年 8 月 15 日の戦争終結後は学校に復帰しましたが、そこでは球技類も完全に復活しました。私もサッカー部に入りましたが、平常の練習は「裸足」。ボールは 1～2 個を持ち帰り、切れた部分を縫うこともやりました。こんな中で右足首を捻挫してしまったためサッカー部を離れて文芸部に席を置くようになりました。

☆大学時代☆

入学したのは昭和 25 年です。中学と大学への進学で 1 年ずつ浪人をしましたから、都合 2 年浪人して卒業→入学したことになります。足の怪我から 4 年経過していたので復活が可能でありサッカー部に入部しました。1 年の時は関東リーグ 3 部で優勝し、以後、2 部の中で頑張っていました。3 年のシーズン終了後、富浦の寮でのミーティングで「キャプテン」に指名されました。最終学年も部員の健闘のお陰で 2 部に残留することができました。

☆社会での活動☆

松本先輩の紹介で山口県に本社のある宇部興産(株)に転職しました。

これは松本先輩が熟知しておられる岡田完二郎氏が副社長を務めておられたことによるものと思っています。この会社には入社当時サッカー部はなく、ラグビー部が各事業所にあるという状態でした（全部で 8 チーム）。このような中で同好の士 = 20 名近くいたでしょうか = を集め、部活動を始めました。ほぼ同時に地元宇部高等学校のコーチも勤めました。

☆40 雀クラブ東京への参加☆

昭和 53 年に中学卒業 30 周年の会合をもちましたが、東京農大監督の内田計手氏

（後に同大学理事長 = 故人）からクラブ加入の打診を受け OK し、秋には承認されました。

その後、昭和 58 年までの在京中と、60 年の鹿児島・宮崎、61 年の広島・山口への遠征には付き合うことになります。その後、自分の高齢化もあり退会しようとしたのですが、その年の総会で 70 才以上のメンバーからは会費を徴収しないと規約が改正され、在籍したまま今日に至っています。

☆山口 60 雀クラブ☆

前記の東京のチームが山口への遠征を考えたのは、昭和 60 年の年末頃だったでしょうか？

早速、山口高校の 1 年後輩でサッカー部のキャプテンだった川上政治氏（故人）に相談し、チーム結成の目処がつけました。昭和 61 年 4 月末には両チームの試合が実現しました。

山口でのチーム結成の余波は周辺都市に及ぶという効果もありました。実際にプレイしていると 60 歳が 1 つの境目と思われませんが、これが「ねんりんピック」誕生への入り口になったように思います。実際には第 10 回大会（平成 10 年）から実現しました（この開催場所は愛知県）。

私も 3 回程山口県代表として参加しました（平成 11 年 福井県、13 年 広島県、14 年 福島県）。更に平成 19 年 6 月に熊本県でシニアの大会があり参加しました。しかし、様々な形で疲労が蓄積したのか、11 月から年末にかけて 45 日も入院することとなり、これ以降は試合には参加していません。

☆女子チームについて☆

最近のサッカー界をみると、女子のレベルが男子より遥かに上回っているようです。

東京で昭和 53 年秋に女子チームとの対戦が組まれ勇んで出掛けて行ったのですが、60 才以上という年令制限で応援側にまわりました。昨年 12 月に引退を表明した澤穂希さんが出現する前のことでした（会場は駒沢競技場）。

☆おわりに☆

平成 27 年に入って体調不良となり 4 月に入院しました。

診断の結果は「前立腺癌」「敗血症」でした。2 つの病院で 4 ヶ月余りを過ごしましたが、この間に「介護 1 級」の認定がおりました。結果的に健常者と障害者の 2 つの世界を体験することができました。個人的には 80 才まではボールを蹴りたいと思いながら、77 才で蹴り止めとになってしまいました。身体状況の結果ですから無理は禁物だと思います。西松会の皆さんにもいつまでもボールを蹴ることは続けて欲しいのですが、それが叶わなくなった時のことを考えると、何かボランティアで活動出来るものも目標にいたら如何でしょうか。私が関係したものの 1 つに「山口県交響楽団 = アマチュア =」があり、山口県から「文化功労賞」「県選奨」を受賞していましたが、平成 27 年 11 月には文部科学大臣による「地域文化功労者表彰」を受けました。

（終）

西松会から六十年・・・FC 東京前夜まで

石井 徹 (昭 30 卒)

昭和 30 年一橋卒業と共に西松会に入ってから、早くも 60 年が経ち、一緒に入学し卒業した高田勝巳君が、昨年 3 月急逝してしまった。彼ほど母校の蹴球部、西松会と一筋に思いを馳せて、その成長を常に心配し、過ごしてきた会員は多くないのではないかと思われる一人であった。



卒業後、私は会社蹴球部のチームの一員として、実業団リーグで 11 年間ほどプレイをした。この間、合間には偶に小平に出かけ、学生諸君との練習試合に参加したり、秋のリーグ戦を応援しに行ったり、他の OB 同様、現役学生の支援に余暇を過ごした。その後、会社蹴球部で監督を 4 年間務めさせられたが、すぐ後から橋本君が入社してくれましたので“これで助かった、これからは仕事本務にだけ付いていればよい”と思ったものである。しかし、それから 10 数年経って働き盛りの中間管理職になり、社員の福利厚生や余暇活動の統括管理指導等を含めた会社労務政策の過半を企画運営する責任者の任に就かせられてしまった。暫くして社長の交代があり新社長に各部ごとに担当業務の説明をすることになった。しかし新社長は、勤労・厚生・人事といった社内管理業務には、それまで全く未経験の人だった。他のことは大体理解してもらったが社内の文化部・運動部の運営については殆ど分からず、特に對外活動を行う運動部については厳しく、その必要性・有用性の評価もそこそこの有様。都市対抗戦に出る野球部は辛うじて認めてもらったが、マイナースポーツではあるが社内では伝統のある蹴球部、庭球部などを始めその他のスポーツ部の存在は風前の灯となった。

運動部出身である私が管理者の代に、サッカーを始め他の各運動部を潰すわけにはいかない。それから社内の智慧ある先輩諸兄の間を駆け廻り、且つ多少の画策の末、各運動部にも一般業務同様担当役員を置いて運営を見てもらうことにして、何とか存続に決着を見た。

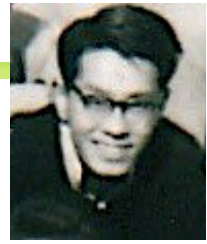
昭和 39 年の東京オリンピック後、サッカーも少しずつ盛んになり、実業団リーグも改組して社会人リーグとなった。当社蹴球部は東京リーグで毎年上位を占め、上の関東リーグを目指して活動していった。その結果、昭和 50 年代には関東リーグに昇格し、このリーグでも切磋努力の末、有数の実力を認められる活動をするようになった。その頃、本務に一意専念し、もう運動部とは離れたと思っていた私に蹴球部の部長をやれと先輩からお鉢が廻ってきて、周囲の状況からこれを逃れられなかった。当時の部の監督は非常に有能な指導力のある W 君（慶応出身）で、部の統率にも勝れ、選手採用にも積極的で優秀な新人を各校から集めるのに腐心努力していた。そこで相談の結果、高校卒の採用は監督に任せ、大学での新人採用については会社の了解も得て私が責任を持つことにした。監督からは関東大学リーグで優秀な選手の採用要望が毎年上がってきて、私が面接をして良いと思った者を勤労部の人事に願って採ってもらうという蹴球部の補強が、昭和 60 年前後、数年続いた。早稲田・慶応・中央・筑波・京都などから大学リーグで傑出した選手を入れてもらうことができた。後年プロに転じ、U23 代表チームの監督をした大熊君（中央）、FC 東京（株）現社長・大金君（筑波）なども会社に願って入社した花形選手たちであった。色々な努力が実り、東京ガス蹴球部は関東社会人リーグで毎年首位か、それに近い成績を挙げるようになった。平成 2 年には各地域の勝者が集まる全国社会人選手権大会で優勝し翌年日本リーグの 2 部に入ることになった。平成になって間もなく私は子会社の専務に転出させられ、部との随時の触接が難しくなった。平成 3 年春の区切りの会合を期に部長を辞めた。この年ブラジルから来日し、蹴球部に加入してプレイすることになったアマラオ選手と握手したのが最後になった。

このように私は専ら東京ガス蹴球部一辺倒にかまけ、西松会には不義理をしていた。母校蹴球部の強化援助には橋本君に関わって貰い、会長を務めた高田君やそれに続く志摩君等が努力する、現役学生の指導応援や西松会の運営には何の手助けもできなかった。会社蹴球部の部長をしている時に、たまに学卒部員たちの話を聞くことができた。リーグ優勝した時、関東大学リーグ 1 部への昇格の時とか、さまざまな場面でのことが開陳されたが、私は殆ど一方的に聞き手であった。私が痛切に感じたのは、チーム力が上昇していく時というのはサッカー部内各員の物凄い盛り上がった意志力の集合が勝利に向かい、部内に力強い雰囲気を作り部生活やその運営を充実させたということ、それは同時に指導者の方向づけを明確なものにし、チーム力増強へ繋がっていったということ、そして活動の成果は全員の自信に変わっていったということであった。母校の蹴球部にも何とかこの様な強靱な意志が、団結した部の盛り上がりの気風を現出させてくれることを期待したい。又その様な底力が是非とも必要だと思った。このことは過日、西松会の誰かには断片的に話したことがあったと思う。

東京ガスは、当初、時の経営者はプロ志向を否定していたが、数年後これを変更し、プロ参入の意志を表明し、平成 10 年 10 月、他の有力企業の協力も得たが、もちろん東京ガス蹴球部が主体となって（株）FC 東京が設立された。現在では私に関わってきたスタッフも選手も、もうとっくに残っていない。それでもやはり J1 シーズンが始まると、FC 東京公式戦がある時は、味の素スタジアム・ホームスタンドのシーズンチケット席に座って居ざるを得ないのである。

我が青春の思い出

村上 信勝（昭 36 卒）



私は、昭和 32 年 3 月、広島修道高校を卒業した。一橋入学後、それまでの受験勉強に明け暮れていた毎日からの解放感に浸っていた。スポーツ好きの私は、小平のグラウンドに立って、サッカー部に入学することに決めた。しかし走るの苦手、また眼鏡をかけていたのでキーパーを希望して練習を始め、2 年先輩の駒井さんに連日初歩から鍛えられた。先輩キーパーが欠場気味だったので、1 年生の秋のリーグ戦から試合に出ることになった。まだ実力が充分でなく、キャッチングミスやトンネルも何回かあったが、それでも秋のリーグ戦には全試合出場した。2 年生になり引き続き駒井さんに毎日鍛えられた。あとになって聞いた話だが、2 年生の時にかなり上達し、キーパーらしくなったようだ。

★昭和 35 年 筆者が 4 年生の時



私にとって最も苦手なものは、年に何回もある 3 キロ、5 キロの長距離の全員そろってのランニングである。玉川上水沿いの道を走るのであるが、殆んどいつもビリで、グラウンドに戻ってくるなり、倒れ込むこともあった。3 年生、4 年生になると身体も鍛えられて強くなり、スポーツ選手らしくなった。

つらい練習の後、小平学園駅前の蕎麦屋や西荻窪駅近くの中華料理店で皆との夕食は、とても楽しかった。その後の人生で、あの小平時代のランニングの苦しさを思い出して、色々な苦しさを乗り越えて来られたように思う。

★昭和 34 年 秋季リーグ戦の試合前 東大御殿下グラウンド



そうしたサッカー中心の学生生活での楽しみは、広島への帰省である。

新幹線もまだ無かった時代であるので、東京発広島行き呉線経由の急行「安芸」号に乗る。夜行列車なので、翌朝大阪駅に着く。山陽線に入り左手に瀬戸内海が見えてくると、広島が近くなってきたことを実感して、血が騒いでくる。

3年生の夏、昭和34年の帰省は、前年、紀勢線が東西全線開通したので、広島への途中、那智の滝を見に行こうと同期の小林君を誘った。名古屋から紀勢東線に乗り、三重県の南端、熊野川沿いの尾鷲で下車し、尾鷲ユースホテルに宿泊した。午後2時頃、遅めの昼食を食べに食堂へ行ったが、ガランとしていて、反対側の片隅のテーブルに2人の若い女性がいるのみであった。そこで私と小林君は女性のいるテーブルに移動し、自己紹介しながら話し始めた。2人の女性は関西のK女学院大学3年生で紀州を旅しているとのこと、そのうちの1人で私の前に座っていた女性はバスケット部のキャプテンで明るくよく喋る。スポーツをする女性と話しをするのは初めての私にとって、彼女はとても眩しく感じられた。秋には試合で上京すること。再会を約束して別れた。私と小林君は翌日、那智の滝に参拝。大阪へ紀勢西線に出て、私の自宅のある広島に帰省し小林君を宮島に案内した。その年の秋、彼女が上京してきたので試合の応援に行き、また私の関西遠征の試合には応援に来てくれた。私が帰省する際、大阪で途中下車して、阪急沿線の彼女の自宅を訪問したこともある。当時は今と違い、文通が唯一の手段であったので、お互いの連絡にすごく時間がかかった。

私は昭和 36 年 4 月、銀行に就職し、丸の内の本店での研修が始まった。
学生時代とは全く異なる環境での毎日となり、彼女とは遠隔地でもあって次第に疎遠になった。
それからおよそ 1 年後、彼女から結婚したとの挨拶状が来た。私は新入社員として仕事を覚える
毎日で、とても忙しかったが、学生時代の彼女との思い出を懐かしみ、しばし感慨にふけた。

私は銀行入行後 3 年目で結婚し、その後 30 才過ぎでロンドンでの 1 年間の海外研修生、
1980 年前後のロスアンゼルス、1990 年前後のニューヨークと、米国で 8 年以上勤務した。
米国での家族共々の生活により見聞を広めることができ、妻も米国での生活を楽しんでいた。

私がそろそろ定年退職という 56 才の時、妻が腰痛を訴えた。
検査の結果、胆嚢ガンで余命半年と医者から言われたのである。
つらい看病も虚しく、54 才で亡くなった。

60 才で定年となった私は、
自分の健康を維持するために、月 1 回の男の料理教室に通い始めた。
またゴルフ以外の趣味として、油絵や俳句も習い始めた。

ある時、その俳句仲間と国立のキャンパスへ吟行に行った時のことである。
その仲間の 1 人が、兼松講堂の外観は自分の母校 K 女学院の講堂とそっくりだと言う。
そこで、実は自分の初恋の人は K 女学院のバスケット部の人だと言ったところ、
なんと、その俳句仲間の人は、たまたま彼女を知っていたのだ。
彼女は東京近郊に住んでいるとのことで、連絡先を教えてくれた。

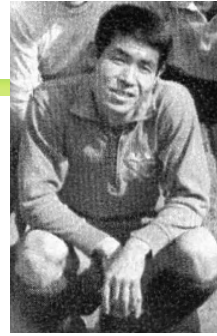
50 年ぶりに偶然分かった消息に、お互い大変驚いた。
早速その俳句仲間の女性を交え、3 人で如水会館で会い、
半世紀ぶりに私は彼女と再会したのである。
お互い昔を思い出しながら話に花を咲かせた。
色々話しているうちに共通の趣味もあることが分り、話題は豊富にあった。
その後、時々会って、学生時代を思い出しながら昔話をするのは、楽しいものである。

(終)



恩師回想

栗又 俊二（昭 42 卒）



昭和 18 年生まれの中戦派で、昨年で 6 回目の年男となる。
何を書こうか迷ったが、青春時代の教師であり、
一昨年亡くなった恩師へ追悼を込めて書くこととした。

それは、小生が高校 3 年になった春であった。

都立文京高校 3 年生の時、クラス主任として担当した時が初めての出会いであった。

先生の名前は竹内道雄先生。専門教科は歴史であり、特に世界史、日本史が得意分野だった。
小柄な身体であったが、青々と剃り上げた坊主頭で、何時も礼儀、姿勢正しく、満面に笑みを
浮かべ、穏やかな優しい眼で周囲を見守っていた。それもその筈である。先生は大正 11 年

（1922 年）生まれで雪国新潟県十日町市の出であり、この地の古刹である曹洞宗^{じんとうじ}禅寺の神宮寺の
住職であった。故郷の十日町から昭和 16 年旧制新潟高校入学、東大文学部国史学科へと進み、
大学院に入り、曹洞宗の始祖たる道元禅師研究を生涯のテーマとしていた。15 歳の高校進学時
から、将来は教育者になる夢を抱いていたようだ。併せて、父の跡を継ぎ、神宮寺の住職になる
ことを決心していた。しかしながら、大学入学以降迫りくる戦火に抗せず、一大決心をして、
昭和 18 年 12 月学徒出陣し、終戦を台湾で迎えることとなる。先生は、台湾バシー海峡に立ち
ながら敗戦を知った。こうした体験から平和な文化国家日本を作るのだという使命感を一生
持つようになり、我々教え子にもこの教えを貫くこととなる。戦後、昭和 21 年に復員。大学へ
復学し、生まれ変わった道元禅師研究に没頭。大学の教授の薦めもあり、大学院進学後、益々
道元研究に深化するようになった。

文京高校との繋がり、大学院生時代から夜間部の臨時教師として歴史（世界史、日本史）を
教え始めたことからによる。その後、大学院卒業後、将来の夢である教育者として同校の全日制
教師となった。自分の教育観の基本理念は「これまで大学院時代に学び、研究してきた道元禅
研究の成果を教育現場に生かす」ことであった。学問と教育の一致一如を目指すことであった。
こうした中、竹内先生との交わりができた訳だが、先生が歴史の授業で道元禅師の生涯の行動、
「随聞記」などに見られる言行を興味深く織込み話されたことが、小生を含む生徒にも大変興味
深く又感化を受けたようだ。

先生との交流は、卒業後も、社会人になっても続き、十日町の神宮寺を訪れ、
座禅を組んだ思い出も忘れられない。先生の出版記念会を仲間と実行した。喜寿を迎えた際は、
現地でお祝い会も開催した。その時の先生の感謝の言葉も忘れられない。新潟地震により損傷
した本堂の復旧を物心両面から支援した。数々の教えと思い出を残してくれた先生も、一昨年
7 月、92 歳で黄泉の世界に旅立った。大往生であった。同期の仲間と本葬儀に参列し、感謝の
気持ちを捧げた。

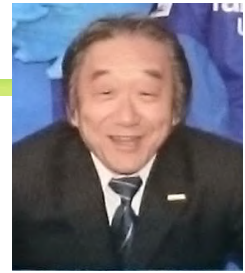
先生は文京高校退職後、新設の長岡高専、愛知学院大学教授に招かれ、74 歳まで奉職している。大正、昭和、平成と3代を生き抜き、戦前、戦中、戦後を経験されている生きる字引であり、尊敬すべき貴重な存在であった。小生、今年73歳を迎えるが、先生が同年代であった時とは足元にも及ばず、只々、日常の平凡な生活を充実させるべく努力するのみである。ただ、先生の教えである報恩感謝の精神は生涯にわたり持ち続けていたい。

★2014年6月 旅先のアメリカ・モニュメントバレーにて



私と FC 町田ゼルビアとの出会い

土方 周明（昭 52 卒）



私と町田のサッカーとの出会いは、私が町田青年会議所（町田 JC）に入会した 1987 年に始まります。町田 JC は、町田サッカー協会と共に小学生低学年を対象とした JC 杯サッカー大会を開催しており、その運営に参加した時からです。その時の子供たちの目の輝き、素敵な笑顔が今でも忘れられません。その指導者が故重田貞夫先生であり、現在一緒にゼルビアの下部組織を運営している NPO 法人理事長の守屋実先生がサッカー協会役員として関わっていました。

その後、Ｊリーグ発足前の 1992 年、当時少年サッカーの盛んな街だった町田にＪリーグチームを実現したいという思いで、町田サッカー協会と町田 JC で熱く誘致活動を始めました。横浜に 2 チームがありましたので、そのうちの横浜フリューゲルスが町田をホームタウンにしたい旨を一部関係者に表明し、その実現へ向けて我々両者が一体で実現へ向けて行動しました。しかし当時の市長はスポーツ環境の整備（スタジアム等の建設）に多額の金額がかかるため、この話を断り実現できませんでした。町田は多くのＪリーガーを輩出している街なので、それではサッカーのイベントを年 1 回開催しようということで話がまとまり 1993 年からサッカーフェスティバル in Machida がスタートし、その運営に多くの仲間と共に携わりました。その時から、FC 町田トップチームとの繋がりが深くなり始めていて、町田のシンボルとしての名称を決定しなければいけないということで、いろいろな候補の中から決定しました。それが「ゼルビア」です。ゼルビアのゼルは町田の市の木である「欒」を英語で示す「ゼルコバ」から、ビアは町田の市の花である「サルビア」から、2 つ合わせてた造語で「ゼルビア」と名づけました。

東京都社会人リーグ 3 部時代から本格的に関わり、2 部、1 部、関東リーグ 2 部、1 部、そして戸塚哲也氏を監督に迎え、忘れもしない、鳥取での地域リーグの選抜試合、それから石垣島での JFL 昇格トーナメントを勝ち抜き JFL に昇格。監督を現在の相馬直樹氏に変更して JFL を闘い 3 位になりましたが、そこで監督が引き抜かれ、新監督にランコポボヴィッチを迎えました。そこで再度 3 位、後はＪリーグへ登録するための基準を満たさなければいけないことになりました。町田市とスタジアム建設へ向けての度重なる打合せ、また、Ｊリーグとの町田市の意向を受けたスタジアム要綱の順守の説明等、タフなネゴシエーションの末、やっとＪ２への昇格が認められました。しかしＪ２昇格を決めたポボヴィッチ監督も引き抜かれ、あのオズワルド・アルディレス氏を監督とし、Ｊ２を戦いました。Ｊ２シーズンでは、スタジアムは建設中であり、臨時の放送設備棟を建設するというウルトラＣを行い、厳しいＪからの要求に答えながらシーズンを戦い抜きましたが、その結果は、Ｊリーグで初めて適用された JFL への降格基準適用の最初のチームとなってしまいました。

その後の話は、また次回ということにしたいと思いますが、
現在の私の立場は、(株)ゼルビアの参与で NPO 法人アスレティック町田の副代表です。
なぜこのような仕組みになっているかというと、Ｊリーグは株式会社だけにしか登録を認めないため、(株)ゼルビアをＪのために設立してトップチームだけを運営するようにし、下部組織は NPO 法人で運営を行う 2 重組織にしました。NPO 法人でないと市または公の施設は借りることができないためであり、(株)ゼルビアを市が応援しているといっても市の施設利用料の制限があるためで、高い料金を払っている状況です。また施設面でも、Ｊリーグから言われている天然芝の練習場はありませんし、現在練習している人工芝のグラウンドは、NPO 法人が TOTO の助成を受け NPO 法人の借入のもとで利用している状況です。他の地方はかなり優遇されているようですが、町田市は勿論、東京都の補助も何もなく運営しているチームは大変厳しい中であることは間違いありません。

でも私は、FC 町田ゼルビアがサッカーを愛する人たちだけのものではなく、
町田の子供たちがスポーツを通じて健全な肉体と健全な精神を宿す人間として成長するための一つのきっかけとなり、FC 町田ゼルビアが総合型スポーツクラブの礎として町田の人々に愛される存在になるためのお手伝いを、これからも続けさせていただければ幸せであります。是非皆様のご理解、ご協力があれば幸いです。どうもありがとうございました。

LOVE ZELVIA LOVE MACHIDA



GM 回顧録

安部 太郎（平5卒）



もはや 20 年以上も前のことになりますが、大学時代の 4 年間にわたるサッカー部での様々な経験は、自分にとって貴重な財産であることを改めて過去を顧みて今回の文章を書きながら感じています。その中でも特に印象的なのは 4 年生で GM を担当した時の経験ですので、その当時の今でも記憶に残っているポイントと、現役部員の皆様へのエールを以下に述べたいと思います。

まず GM として新チームでのサッカーの方向性に関しては、当初から自分の中での迷いはありませんでした。当時の 2、3 年生には技術が優れている選手も多く、彼らのポテンシャルを最大限に引き出す攻撃重視のパスサッカーが向いていると判断しました。従って練習メニューではボールに数多く触り、個人技をレベルアップすべく、パス回し、ドリブル、1 対 1 やミニゲームといった内容を数多く行いました。一方で、シュート練習やフォーメーションといった練習の割合は少なくしました。それはボールのキープ率を上げて敵の陣地に攻めなければ、シュートがそもそも打てない、攻撃パターンや守備の方法は多くの練習試合を行うことで、チームメンバー同士で、自発的に連携してプレーするようになるとの考えからでした。

次に、今で言う PDCA サイクルの実行を心がけました。

秋のリーグ戦までの期間は短いようで案外に長いものであるといった信念のもと、計画的に日々の練習の積み重ねを行って決戦に備えるようにしました。具体的には練習メニューを作成（Plan）、実行（Do）、練習や試合内容のチェック（Check）、改善する（Action）の繰り返しです。ただ、最後の Action の見極めが一番難しいポイントではありました。ある練習試合で、後半に足が止まったからといって、急に次の練習からランニングメニューを取り入れるのは、ボールを多く触ってテクニックを向上させる練習時間を犠牲にするといったジレンマ、試合でミスをした選手を次で先発から外すのは、選手のプライドやその後のモチベーションをそいでしまう、といった感じです。GM といえども同じ学生同士であり、朝令暮改の方針変更や冒険的な選手起用は、時には部員からの不信感を買うリスクもありました。ただ責任の所在は全て GM にあり、最後は試合の結果が全てであるという点を自分に言い聞かせて、毎日を過ごしていました。そのために 4 年生の時は他の部員とは意図的に一線を画し、孤独になりがちではありました。幸い、自分の練った練習内容や試合での選手起用に対して多くの部員が違和感を覚えた際には、後でこっそりとチーム内の雰囲気を感じてアドバイスをくれる部員も中にはおり、それは自分が気づかなかった点をハッと気づかせてくれる、大変ありがたいものでした。

最後に現役部員の皆様へのエールです。

その年の秋のリーグ戦では、部員全員の努力の結果が実を結び、入れ替え戦に勝利をして2部に復帰することができました。内容的にはリーグ戦の初戦を落としてスタートし、最後まで困難な道のりが続きましたが、この時の経験は、逆境からでもチームの最終目標に到達できたという点で、その後の自分に自信を与えてくれました。基本は学生が主体となって運営していく一橋大学サッカー部は、自分たちで考えて強い信念を持ってサッカーに取り組んでいくことが必要な点は、時代が変わっても不変の法則だと思います。現役部員の皆様も、悔いのないように毎日のサッカー部での活動を充実したものにしていきたいと切に願っております。

★平成16年（2004） バルセロナのカンプ・ノウにて



ダブル優勝に向けて

彦坂 達哉（平 25 卒）



全国高校サッカーは東福岡高校の優勝で幕を閉じ、日本のリオ五輪出場が決まるなど、若い世代の活躍に注目が集まっていますが、高校サッカーの選手はもちろんのこと、五輪代表選手でさえも自分よりも年下であることに、若干の焦りと時の流れの速さを感じます。リーグ戦の応援には毎年行かせてもらっていますが、早いもので一橋サッカー部が東京都 2 部に昇格してから 4 シーズンが経ちました。1 部昇格のハードルはやはり高く、あと一歩のところまで涙を飲むシーズンが続いていますが、技術面や戦術面といったプレー面に加え、サポートしてくださる外部のトレーナーの方々や、強豪校との練習試合などといった環境面においても私が現役だった数年前に比べ、はるかに高いレベルの中で闘っているという印象を持ちます。当時は歯が立たなかった相手に対して互角以上の試合をしている姿を見て、誇らしく思うと共に是非とも目標である 1 部昇格を果たしてもらいたという想いが強くあります。

一方、私自身の活動はと言いますと、引退してからというものサッカーは専ら観る側に徹していましたが、現役の取り組みに感化され・・・仕事に対するストレス発散が主目的だったりもしますが（笑）・・・昨年から東京都社会人リーグに参戦している、若手主体の OB チームに参加しています。昨季は発足して 1 シーズン目ということもあり、人繰りさえまならない状態で、結果は 5 勝 2 敗の 10 チーム中 3 位、東京都 4 部残留という悔しい結果に終わりました。なかなか言うことを聞いてくれない身体とは裏腹に、ピッチに立てば現役時と変わらず真剣にボールを追う感覚が気持ち良くもあり、また久々に会ったにもかかわらず同じ感覚で集まることができる仲間や存在を心地よく感じました。やはりサッカーはプレーするに限ります。ただ勝たなければ面白くないというのがスポーツの常ではあるので、今シーズンこそは昇格を果たしたいと思います。是非、今年は現役・OB チームともに優勝・昇格を果たしましょう！



★OB チーム
試合前の 1 枚
前列 8 番が私

追悼

故高田勝巳先輩 一周忌追悼記

志摩 憲一（昭31卒）



高田勝巳 昭30卒

平成27年3月10日、恒例の西松会総会が日本橋レストラン「アリス」で開催された。そこには、数十年来の常連、高田勝巳先輩の姿がなかった。

何かあったのか、それとも閉会が夜遅く、遠路横浜の自宅に帰るのが大儀な年になったのかなと懸念しつつも、そのまま過ぎていった。そして総会から間もない20日後の3月30日に、思いも掛けず訃報に接することになった。あの時、電話しておけばと、今でも悔いが残る。

高田さんは昭和30年の卒業で三菱重工に入社し、殆どが首都圏勤務と地理的条件に恵まれたこともあり、西松会や現役とのコンタクトがOBの中でも最も多い1人で、幹事・代役幹事・会長を歴任され、西松会の会務・運営に永年に亘り貢献された。高田さんは、やや小柄の中肉中背で、地味な人柄のため目立つ存在ではなかったが、西松会行事や現役の試合には常に顔を見せていたので、顔馴染みのOBも多いことと思う。

高田先輩と私は同じ都立立川高校出身（現蓼沼学長も同窓）で、1年後輩に当たる。

同窓の誼み・気安さから色々御用を申しつかることが多かった。私は荻窪在住で小平を始め交通不便な東京西郊のグラウンドには専ら車を使っていたが、現役試合観戦の帰りは高田さんも同乗し、至便な駅まで送るのが常であった。現役の波崎会館の時は、「明日〇〇時に〇〇で待ち合わせて波崎に行こう」というような配車指示を承ることも度々あった。車に同乗した時は、やはりサッカー談義に終始したが、愛好家ならではの博識には今でも敬服している。

例を挙げれば、1930年に始まったFIFAワールドカップの2014年20回大会までの歴代優勝国名とか、サッカーの日本伝来は1873年英国の海軍教官が築地の海軍兵学寮（後の海兵）で幹部候補生にサッカーを教えたのが始まりとか、etc. 色々蘊蓄を披露された。

平成10年、高田さんが西松会の会長候補になった時、

前年会社をリタイアしフリーになった私に「手伝ってくれ」と言われ、副会長に指名された。現役の試合のあるところ、雨の日も風の日も、遠隔地であろうと、そこには影武者のような高田さんの姿があった。現役戦だけではなく、自宅が横浜の日産スタジアムに近いこともあり、Jリーグや国際試合、更には首都圏グラウンドで行われるインカレやインターハイまで足繁く通っていた。サッカーとなると血が騒ぐ「サッカーの虫」だった。平成27年3月の総会時に発行された「西松会新聞」の自由テーマに、高田さんが「私的サッカー論」と題する一文を掲載された。図らずも、これが遺稿となった。私には高田さんの靈感が働き、生存中に現役の練習指針を遺したと思えてならないのである。

一橋は学生数が少なく、スポーツ施設にも恵まれない学生スポーツマイナー校という環境の中で現役部員が勝利の喜びを共有できるよう、これまでの多様な観戦経験と観察力を生かし「基礎的的日常練習項目」を「私的サッカー論」にまとめられた。要約すれば、

- ① サッカーはボールの奪い合いである
(練習) ドリブル、1 : 1、タックル、運動量、出足、他
- ② ボールをキープしても、シュートしないとゴールは奪えない
(練習) 納得のゆくまで、個人シュート練習、他

特に目新しい項目ではないが、意図するところは、まず意識を持つこと。

即ち ① は、守り ―― ボールポゼッション、不落。② は、攻め ―― 止め（とどめ）という最終目的を意識して、その習熟・完成手段を練習することと理解している。全てのスポーツの基本要素は、心・技・体（メンタル・スキル・フィジカル）と言われているが、そのうち現役部員のスキルアップと基礎プレイの反復練習も指摘された。例えばミドルシュート練習を 1、2 年でみっちり体が覚えれば、3、4 年では自然と身に付き、枠を捕らえるシュートで得点できる。各種基礎プレイが学年が上がるに連れて向上するよう基本的練習メニューを作成し、実践することが一橋サッカーの格を上げ、ひいては高田さんのサッカー哲学・遺訓に応えることになると思う。

高田さんの現役時代は、終戦から 10 年も経たない昭和 20 年代の後半期で、プロ野球が川上の赤バット、大下の青バットで隆盛期を迎えたのに対し、サッカーは未だ競技人口が少なく、後の Jリーグの母体となった実業団チームの勃興期だった。高田さんの学年は石井徹さんと 2 人のみで、当時は関東 2 部に定住していたが、今のように殆どが経験者というには程遠く、チーム編成に四苦八苦していた。ボールを始め、サッカー用具やグラウンドも、今のプレーヤーが想像もできないようなお粗末さだった。この時代は一橋サッカー部の創部（大正 10 年）から昭和 10 年代の動乱・戦争の試練を乗り越えて約 30 年経過していたが、創部発起人の松本大先輩（元最高裁判事）を始め、多くの先輩と西松会総会、松本邸の新年会（成人の日）、グラウンドなどで交流し、人生やサッカー競技について貴重な指導をいただいた。OB 戦では関東 1 部で早慶に伍して健闘された先輩戦士のパワーとスキルに憧れたものである。

高田さんの逝去は、こうした創部以来の一橋サッカー部の歴史を継承する語り部を失うことになり、時代の流れを思い知らされ、寂しい限りである。最後に、高田さんが一橋サッカー部に注いだ情熱が、脈々と受け継がれることを願い、追悼の言葉を捧げる。

＊昭和 30 年 卒業アルバムより＊



 ほろ苦い記憶

福本 浩（昭 52 卒） 編集長

今年も無事に発刊することができました。

寄稿してくださった皆様に厚く御礼申し上げます。

毎年原稿に目を通してしていると現役時代の様々な思い出が蘇ってくるのですが、

今回、悔しさに溢れた現役諸君の原稿を読んでいて蘇った記憶があります。

それは4年の秋季リーグ戦で、先発から外された悔しさ・・・

今思えば、関東2部の強豪校との戦いで、ロングボール主体の守備的サッカーを選択せざるを得なかったチーム事情は理解できます。ボールを扱う技術には自信があったのですが、何しろ体重が40数キロしかなくて当たりに弱く、キック力もないのですから、外すのは当然です。雨の日の泥沼のようなグラウンドでは特に使えない選手でした。けれど当時の私は、中学から10年続けてきたサッカーが、こんな形で終わるのかと悔しさばかり募り、ふて腐れ、わざとガムを噛みながら練習に参加したこともあります。そんなことは許されない時代で当然チームメイトの1人に罵倒されました。どうしようもなくガキでした。しかし何がきっかけだったか、もう思い出せませんが、全体練習後に居残って玉川上水沿いを走ったりキック板を相手にダイレクトシュートやバスの練習に励むようになったのです。タバコもやめました。最後の日々をふて腐れたままで終わるのは、あまりに悲しいと思ったのかも知れません。

そしてリーグ戦のおそらく最終戦、東大との試合で初先発しました。

レギュラーの1人がケガをしたためです。自分でも驚くほど身体が軽く、ボールが足にくっついているような、これまでにない感覚がありました。結局、練習不足、自分の努力が足りなかったのです。試合には勝利し、私は人目もはばからず声を出して泣いてしまいました。チームメイトを見返す気持ちと、自分に対する腹立たしさが混じった涙。恥ずかしく、ほろ苦い記憶です。

チームの為なんか、これっぽっちも考えていないやつでした。こんな私ですが、思うんですよ。

結果、結果というけれどプロじゃないんだから、あまり結果にこだわり過ぎないでほしい。

大事なことは結果に至る過程にこそあるんだと。現役諸君には縮こまって欲しくない。

伸び伸びと楽しいサッカーを展開してほしいと思います。

もうひとつ、今年は小平グラウンドで1試合も行われなかったという事実。

もし私の時代にグラウンドが人工芝だったら、私のような身体能力に劣る選手でも、伸び伸びやれた、そう思うと、また悔しさが募ります。どうかOBの皆さま、現役の悲痛な声に耳を傾け、人工芝化プロジェクトに関心を寄せてください。

昨年、東大農学部的人工芝グラウンドで試合をし驚きました。私の時代の、スライディングをすればヤケドのような擦り傷ができる人工芝とまったく違います。ほとんど天然芝と変わらない感触。これが小平に出来れば誰だってサッカーをしに足を運びたくなります。



ともあれ、この西松会新聞も、来年は 10 年目を迎えます。
編集長としては、これまで一度も寄稿したことのない方々に是非書いてほしいと思っています。最初は面倒だと思うでしょうけど、書けば自分の貴重な青春の 1 ページが蘇ってきて、きっと楽しいと思います。あ、何も年に 1 回の西松会新聞だけでなく、いつでも寄稿や写真は受け付けてます。私のメールアドレスに送っていただければ、西松会ウェブサイトで公開します。何とぞよろしくお願い致します。

fukug1954@db4.so-net.ne.jp